
Fate/stay hollow

むり...です

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/stay hollow

【Nコード】

N1523BA

【作者名】

むり…です

【あらすじ】

Fate/stay nightの再構成。サーヴァントはこの世全ての悪^{ユズリシニア}。内容は繰り返される聖杯戦争。死んだらまた、やり直し。聖杯の期限が過ぎたらやり直し。この聖杯戦争を終わらせるために衛宮士郎はなんか頑張っていく物語。キャラの性格がもしかしたら違つてるところがあるかもしれない。

この小説は作者のオリ（妄想）設定によって動いています。オリ設

定が嫌な人はこの小説を読まないでください。あと作者の自己満足
小説です。批判や誹謗中傷はやめてください。

諸注意 オリ設定（オリキャラは出ません）（前書き）

Fateの自己満足小説です。この小説は作者のオリ（妄想）設定によって動いています。

オリ設定が嫌な人はこの小説を読まないでください。作者の自己満足小説です。

批判や誹謗中傷はやめてください。

諸注意 オリ設定（オリキャラは出ません）

Fateの二次創作は初めてです。型月の小説は難しいときいた。なのでボチボチがんばります。

この小説は作者のオリ（妄想）設定によって動いています。

オリ設定が嫌な人はこの小説を読まないでください。作者の自己満足小説です。

批判や誹謗中傷はやめてください。

マスター 衛宮士郎

サーヴァント アヴェンジャー

真命：この世全ての悪 アンリ マユ

宝具：繰り返し『殺されるか、聖杯の期限が切れるかすると一日目に戻る』

：偽り写し示す万象 ヴェルグ・アウエスター

ザリチエ

タルウイ

：右歯噛咬と左歯噛咬

アンリミット・レイステット

：無限の残骸これは公式の者とはちがくする

全身の紋様は『この世全ての悪』を現す呪い。それは時代・時間によって変動していくものなので、シンボルたる『アンリマユ』以外の模様は変化する。

アヴェンジャーは最弱なので他のサーヴァントに感知されることはほぼない。

繰り返しについて。結果は残らないが原因は残る。ただし、アヴェンジャーが衛宮士郎の知らない、起こしてない原因は残らない。そして、結果は返ってくる。

衛宮士郎との関係。

普通のマスターとサーヴァントの契約と少し違う。アヴェンジャーは衛宮士郎と契約しているが衛宮士郎にとり憑いているかたちにもなっている。

聖杯戦争が始まる前からアヴェンジャー（アンリマユ）はもとから衛宮士郎にとり憑いていたが、だがアヴェンジャーは虚無であるから、まったく衛宮士郎には影響がなかった。

そして、聖杯戦争が始まって、偶々土蔵でアヴェンジャーを召還した。媒介はアンリマユ本人なのでアヴェンジャーが召喚された。アヴェンジャーには姿がないのでマスターである衛宮士郎の姿をかりた。

他のマスター、サーヴァントは原作と同じ。

追記する可能性がある。

ゼルレッチの宝箱について

プロローグ

カキンキイインンカキンキイインカキンキイン

俺はグラウンドにいた。

音が聞こえてくる。鉄と鉄が重なり合う音だ。
そこで、観察する俺。

赤い男と青い男が人間とは思えないスピードで鉄と鉄みたいなものを打ち込む。

キイイインカキンキイインカキンキイイインカキンキイインカキン
キイイインカキンキイインカキンキイイインカキンキイインカキン

その戦いは目では追えないくらいの早さで行われている。

鉄と鉄が弾ける音

キイインカキンキイインカキンキイインカキン
キイインカキンキイインカキンキイインカキン

あれは人間ではない。人間はあれほどのスピードで動けるわけがない。

ザッ

その時、青い男の腕の動きが止まった。止まったので手に持っていたものが見えた。紅い槍。

青い男と赤い男が動きを止め。なにやらお互い睨み合っている。

俺には青い男はその紅い槍になにか危険なものを溜め込んでいるようにみえた。

驚き、身動きがとれない感覚が俺を襲う。そのとき、俺は無意識に

「…っ」

「悪いがここで死んでくれや…！」

グサッ

ズドッ

ドサッ

俺の胸にあの紅い槍が刺った。

そして、俺の意識は落ちていく。

……。

目が覚めた。覚めるはずがないと思っていたのだが。誰か助けに来てたのだろうか？

「宝石？」

床に高そうな宝石が落ちていた。

いつまでもここにいても意味がないので帰ることにした。

○

家に着き。畳みにねっころがる。

「……っ！」

今は亡き、切嗣^{じいさん}が仕掛けた結界が反応した。

「まさか…あいつが！」

何か武器となる物を！

ポスターが一個。つつ、仕方ない。

「同調、開始トレースオン」

「構成材質、解明」

「構成材質、補強」

「トレース全工程、オフ完了」

バギッ

上から！

「一日に同じ人間を二度殺すことになるとはな」

紅い槍が俺を目掛けて飛んできたが持っていたポスターでそらす。

「……っ」

紅い槍が俺の頬をかする。

「ほお、変わった芸風だな坊主！」

ヒュンッ！

槍を打ち込まれ、それをなんとか強化したポスターで軌道をそらす。

廊下に行き、窓の近くによる

ヒュンっ！

青い男が俺を目掛けて槍でつく。つかれた槍を回避しよう後ろによける。

パリンッ！！

後ろは窓ガラスがあったので、窓ガラスを割って外に出ることになった。

「オラッ！」

「……があっ」

青い男に蹴り飛ばされる。俺の背後には土蔵。

「詰めだ坊主。もしかしたらお前が七人目だったのかもな」

「…っ」

「じゃあな坊主。今度は迷うなよ」

死ぬ

ここで終わってしまうのか！。

グサッ

俺の胸にあの槍が刺り、刺さると同時に俺の意識は途絶えた。

根源

2月1日 0:01

「お前は？」

「あ？お前が呼び出したんだろ」

「サーヴァント。アヴェンジャーだ。あんたが俺のマスターか？」

「マスター？」

「なるほど。お前、何もしらねえみたいだな」

「聖杯戦争？」

「そうだ七人のマスターとサーヴァントで行う儀式だ」

○

「へえ、お前、死ぬつもりか？」

「なんでも、死ぬつもりなんてない。俺はただ、戦いを止めさせるだけだ」

「それを、死ぬつつうんだよ」

○

「ぐああああー!!」

「あーあ、マスターが死んじゃったか。やり直しするか。って、俺も死ななきゃいけないのか」

○

「なっ!!…俺は死んだんじゃ」

「俺の能力だ。俺はマスターが戦うなら止めはしねえぜ。何回だつて生き返らせてやるよ」

○

「ぐうああああ！！」

「またか」

○

「
っ!」

「
……っ」

「無理だろ。てか、あいつ、一人で夜出かけるとか死に行ってる
ようなもんだと、いつ気づくのやら」

○

「マスターいい加減、学習しようぜ。俺らには他のサーヴァントは殺せない。だから、マスターを殺せばいいさ。人間であるなら俺は簡単に殺せるぜ。そうだ、次からは俺もついてってやるよ。人間であるならマスターだって殺して見せるぜ」

「それは駄目だ。他の、マスターは殺さない」

「そうかよ」

「…だったら…何度でもやり直してヤルヨ」

1st Day 午前

2月1日

「よお、お目覚めかマスター」

「お前は…アヴェンジャー…」

頭が混乱する。……あれ、てか俺、こんな召喚したっけ？

…目の前には俺の殻を被ったような形をした『この世全ての悪』^{ユスリキ}が俺に話しかける。そいつは俺に話しながらパズルをしていた。

あれ？でも俺、こいつのこと知ってる。…多分俺が召喚したのだから。

「なんだよ、スゲエ具合悪そうだけ。変なもんでも喰ったか？」

「はあ？、そんなもの食べるわけないだろ」

しかし、あのうねうね、凄く気になるなあ。てっ、今はそれとこころではなく。

「前回、俺どこで殺されたんだっけ？」

前回、誰に殺されたか覚えていない。たまにあることだ。

「あ？、前はライダーのあの鎖で殺されたんじゃないか。しかし、あれは覚えてなかったなあ」

そっだ、前はライダーに殺されたんだ。あの鎖で。

「それよりいいのか、桜つて子に先に飯、作られるぜ？」

「今、何時だ？」

「さあな」

時計を見る。少し早めに起きたようだ。俺は布団をかたづけ、居間にむかう。

「…って、お前、そのうねうね取れよ。藤ねえと桜が見たら驚くぞ」

「はいはい、とればいいんだろ。あと宝具だつつつの」

桜はまで来ていないようだ。台所に立ち料理をすることにした。

○

「よし、出来上がり」

ガラアア

どだだだだダダダダ!!!

ん、この音は。

「おっはよおー!おねえちゃんお腹すいたぞおー!」

虎の登場である。

「藤ねえ、…もう少し落ち着いて入ってこられないのかあ？」

「むう、だっておねえちゃんお腹すいたんだもん」

「ハア、はいはい。食事はもうできてるから座ってくれ」

毎日、騒々しい虎である。

「あら、アンリ君は？」

藤ねえが唐突にそんなことを聞いてきた。

「アンリ？…あれ？、さっきまではいたんだけど。どこいったんだあいつ」

「先輩、アンリ君ならさきほど道場のほうに行きましたよ」

え、道場？

「そっか、じゃあ、俺ちょっとアンリのこと呼んでくる。桜と藤ねえは先に食べててくれ」

アンリを呼びに道場にむかう。

「おおい、アンリ。朝食が出来たぞ」

「……………ブツブツ」

「アヴェンジャーはなにやら落ち込んでいるみたいだが。一体どうしたのだろうか。」

「おい、アヴェンジャー」

「おう、マスターどうした」

「こっちにやっと気づいたようだ。」

「飯ができたぞ。てか、お前こそこんなところで何してるんだよ？」

「ああ、それか。なんでだと思っ？マスター」

「アヴェンジャーなりに何か理由があるのだろうか。しかし、道場と

いづことは……そうか

「修業したくなつたとか？」

「んなわけあるかあっ！！大体いまさらサーヴァント中、最弱な俺が修業したって意味ねエヨ！俺が言ってるのは、お前ら、朝からいちやいちゃしすぎでってことだっ！」

いちやいちゃって

「誰がだ？」

「お前だよ！桜つて子とお前だよ！。朝からあんな、いちやいちゃされたんじゃ、いづれんだよっ！こっちの身にもなってみろっ！」

……。

「なんでさ。桜は別にそういんじゃないぞ。そうだ、妹みたいなものだ」

「んなわけねえだろ！。あれは恋する女だぜ。それもお前に。このリア充やろっ！。そしてリア充死ね。どうせいつもあの娘のおっぱいばかりみてんだろ！」

「お、お前は、何、言ってるんだよ。それよか早く飯、喰いにいくぞ」

確かに最近、桜は色々なところが成長している気がする。

「……ああ、わあっただよ」

道場を出て居間にむかう。

「まあ、遅いよう。士郎にアソビ君」

「あれ？先に食べていっていったのに」

てっきり食べているとおもったんだが。

「いえ、作ったのは先輩ですから先に食べるといふことはできません」

「そうか、じゃあ全員そろったし食つか」

いつものように、四人そろって飯を食う。ちなみに、アンリは俺の生き別れの双子の弟という設定で通している。

○

飯を食い終えたら後は学校に登校だ。

1st Day 午後

午前の授業も終わり昼休みになっていた。飯を食うために昼休みは生徒会室に行く。飯が食い終わった後、友人であり生徒会長である柳洞一成に頼まれてストーブを直していた。一成には、一度生徒会室を出ていってもらった。

「ふむ、いつもすまん。直りそうか？」

「ああ…大丈夫だ。ケーブルがいかれてただけみたいだな」

小道具を取り出し、修理を始める。

「いやあ！そうか！さすが頼りになるな！衛宮は」

「大げさだよ一成」

「おっと、昼休みが終わってしまったな」

「じゃあ戻るか」

○

午後の授業が終わり下校時間になる。帰りに商店街に寄り、食材を買って帰る。

「ただいまあ」

家には多分、アヴェンジャーがいるはずだ。

「おう、マスター。思ってたがマスターは弱いよな」

帰ったら突然、自分のサーヴァントに駄目だしされた。

「お、お前だって人のこと言えないだろ」

こいつだって一度も他のサーヴァントに勝ったことがないのだ。

「俺はサーヴァント中、最弱なサーヴァントだからいいんだよ」

アヴェンジャーは毎回何かにつけて、最弱というが。

「それ、言ってる虚しくないか？」

「なるに決まってるだろ」

あ、へこんだ。

1st Day 夜

「今日も見回りに行くのかマスター？」

アヴェンジャーは不服そうに言う。

「行くにきまつてるだろ。誰かが巻き込まれたら大変だろう」

「そう、ま、別にいんだけどさあ。俺らがその巻き込まれた人を助ける実力なんてないだろ。お前だってわかってんだろ？」

「……………くっ！」

確かにそうだが、俺らには実力なんてない。でも、

「誰かが苦しんでいるのを放っておいたままっていうのは嫌なんだよ」

「そうか。さすが、正義の味方様（異常者）だな。」

「それじゃあ、俺、行って来る」

今日は公園に行ってみよう。それで、何もなかったら後は帰ってこよう。

「ちっ……おい、マスター」

「ん、なんだアヴェンジャー？」

アヴェンジャーは気がのならそつに俺を呼び止めた。

「今回は俺も行く」

「は？お前…まさか他のマスターを殺すつもりじゃないよな？」

ずつと前に『俺が戦いに出るならマスターを殺したほうが早い』なんていつてたような気がする。

「マスターがそれを望まねえならやんねえよ」

「本当だな？」

「ああ、本当だ」

なんか急に、そんなことを言われると不気味だな。

「そうか、じゃあ、殺さないってんなら、いいぞ」

「よし、それじゃあ行くか。ああ後、確かに俺は『人間であるマスターを殺したほうが早いつて』と言ったかもしねえが、実はあれ嘘だったりする」

「は、はあ？」

こいつ、今更そんなことを。

「いくらマスターといえども…サーヴァントに守られていたんじゃないぞ。俺の出る幕なし」

「お前、それ早く言ってくれよ」

もう、少し早く言って欲しかった。

「俺は気まぐれだな」

○

家を出て、夜の冬木市に出る。

公園の近くを見て回る。

「なあ…マスター？」

「ん、なんだ？」

アヴェンジャーが、やっぱり駄目だ、みたいな顔で俺を呼ぶ。

「今回の聖杯戦争は全て鍛錬にまわしてみたらどうだ？お前、魔術師なんだろ？」

「鍛錬？鍛錬なら普段からしてるぞ俺？」

「もつとだよ。マスターが弱かったら何度、聖杯戦争を繰り返して
もいみねえだろう？」

鍛錬か。確かに俺に実力なんてない誰かを助ける実力が無い。そう
いった意味では鍛錬をしたほうがいいのだろうか。いや、そもそも
今まですつと魔術の鍛錬をして来たが魔術の腕が伸びたことなんて
あまりないんだぞ。本来ならどこかの魔術師の弟子になるのがいい
のだろうけど、俺には魔術師の知り合いなんていないし。聖杯戦争
中である今現在、他のマスターの魔術師の弟子になるなんてことは
できるわけないし。

……しかし、やっぱりそれでも鍛えたほうが良いかもしれない。

「そうだな。わかった今回は全て鍛錬に回す。このままでは、ずつ
とやられっ放しだし」

「おお、それがいい。お前、たいてい六日間で死んでるし、たまに
は聖杯の期限が過ぎて、また繰り返すのもいいんじゃないか？」

そうだな。そういえば、たいてい六日間で死んでいたな。聖杯の期

限は二週間ある。つまり14日を全て鍛錬に回すことになるのか。いや、もしかしたらそれ以上あるかもしれない。

「そつだな。じゃあ、そろそろ帰るか」

見回りも終わったので家に帰ることにした。

2nd Day

2月2日

目覚めた場所は土蔵だった。ただ目の前には桜の顔があった。

そつだあの後、土蔵に入って魔術の鍛錬を始めたんだ。それで確か鍛錬の途中で寝てしまったわけか。

「ああ、桜。おはよう」

「はい。おはようございます、先輩」

「ああ、すまん桜もしかして……」

「はい、朝食の準備はできていますよ」

やっぱりか。最近、桜に先を越されるな。唯一の趣味みただったものが…。消えていく。……………と、今の自分の格好を確認する。鍛錬と言っても、ついでにストーブとかも直していたので服が汚れていた。

「ああ…この格好で藤ねえの前にでたら、藤ねえのやつ怒るよなあ」

「はい、そうですね。その格好では藤村先生は怒ってしまいますね」

桜は軽く微笑む。

「……………」

思わず、その微笑みに照れてしまう。桜は最近、いろんな所が成長してる。胸とか。

服を着替え、居間にむかう。既に藤ねえと桜とアヴェンジャーは席についてた。そして、俺が席についたところで朝食が始まる。

○

朝食を食へ終え。

「先輩、もしかしたら、明日の夜から来られない日があるかもしれ
ません」

そつえばそうだった。桜は今日の夜から来られない日があるんだ

った。何度かの繰り返しで、これは絶対に決まっていることだと判明した。まあ、要するに桜にとって絶対にはずせない重要な用があるということだ。

「ああ、わかった」

「あ、それじゃあ私は朝連に遅れるので、先にいかせてもらいますね」

「気をつけてな」

「はいっ」

○

そろそろ、俺も学校に行こうかな。

「おう、マスター死ぬなよ」

「お前は朝から物騒なこというなよ」

アヴェンジャーが登場。ちなみにアヴェンジャーは昼間は家にいる。

「…あと、五日、六日後くらいか？」

「……ああ。そうだな」

いきなり話は変わったが。五日、六日後というのは、慎二が結界を

発動させる可能性が高い日なのである。それで結構、毎回、俺はライダーに挑んで死んでいたりする。

「今回はわかってるよな？」

アヴェンジャーが意味深に質問をしてくる。

「ああ、わかってるよ。無謀なことしない。だから、せめて万全な状態で、もう少し実力をつけてから挑もうと思う」

俺はそう言っただけで家を出た。学校に行き。昼は生徒会室で飯を食った。放課後は、少しでも、魔術の鍛錬をしたいので早めに帰ることにした。

家に帰るとアヴェンジャーはパズルをしていた。そっぴや、いつも思うが、まだそのパズル、クリアできないんだ。そのパズル簡単なんだけど。

夜は鍛錬をした後寝た。

3rd Day 17th Day

2月3日～2月17日

俺は今回の聖杯戦争に顔を出さずに、全て修業に念を入れる。

朝は、毎朝早く起き土蔵で鍛錬をする。放課後になればすぐに家に帰って鍛錬をする。

色々なもので試してみた。鉄パイプや木刀などを強化してみた。たまに、息抜きに投影したけど。

Side in アヴェンジャー

まさか、あんな言葉でアイツが修業することになるとはな。まあ、俺がアンナ言葉を言ったのは、四日目、五日目、六日目、以降の世界が見たかっただけなんだが。うまく、いったみたいだぜ。今回は八日目、九日目も超えられんじゃねえか？

○

予想通りだ。

俺たちは8日目に突入した。聖杯戦争の現状はどうなっているかシラネエケド。七人目が現れなくて協会あたりは慌ててるかもしれない。本来、聖杯戦争はいつまでも続けられるわけではねえし。時間制限がある。つまり、時間内に誰も勝者が現れなかったら聖杯は閉じてしまう。つまり期限切れというこつたあ。

聖杯戦争で勝利するには、自分以外のサーヴァント全員を殺さなければならぬが、俺を殺したら聖杯戦争はやり直しになってしまう。俺の宝具はそういうものなのだ。

既にサーヴァントは全員そろっている。俺はいわば、七人目？、いや正確には六人目か。俺は最弱のサーヴァントであるせいかな召喚されたことに誰も気づいてねえ。夜中、町を歩いても他のサーヴァントにバレルなんてこたあねえかったし。

そつだ、俺は最弱なりの生き方をすればいい。

さて、観賞してよつか。聖杯戦争を。

.....°

8
t
h
D
a
y

7
t
h
D
a
y

○

S
i
d
e
o
u
t
ア
ヴ
エ
ン
ジ
ャ
ー

1
6
t
h

D
a
y

1
5
t
h

D
a
y

1
4
t
h

D
a
y

17th Day

結局、今回は無意味に終わってしまっ。

結局、今回の聖杯戦争は全て鍛錬にまわしたが、呆れるほど成長が
しなかった。切嗣おやじの言いつけ通りにやっているけど、本当にこの方
法であっているのだろうか。

○

聖杯は閉じようとしていた。

「で、結局、マスターは何の成果も得られなかったと」

「む、何かは得たぞ。多分…」

色々と物を修理をしたんだ。原因は残るのだから無駄ではなかった。

「けっ…無駄じゃねえか。ガラクタ直してただけじゃん」

「…い、いいだろ、別に」

「おっ、マスター、そろそろ聖杯閉じるぜ」

そうか。また…繰り返すのか。次は鍛錬だけというのは止めておう。

「じゃあ、マスター次で会おうぜ」

俺は自分の部屋に行き、布団に入りそのまま眠りにつく。

B A D
E N D

R e s t a r t

3rd Day 17th Day (後書き)

一週目、終わりだー

ただ、間違った鍛錬しても無意味に終わるといふ結末。

1st Day

2月1日

「……よお、お目覚めか？」

いつもの用に、アヴェンジャーが近くで何かしていた。……
……って！……本当に何やってんだ……あいつ！？

テレビの目の前で……ゲーム？……RPGか。じゃなくてっ。

「お前……それ！」

こいつはいつのまにテレビゲームなんて買ったのだろう。

「おう、そうか前回はマスター、土蔵に引きこもってたからしらね

えんだな」

「お前それいつ買ったんだよ？」

テレビゲームって結構高いんだぞ。てか、金はどっから調達したんだよ。

「いつでもいいじゃねえか。金は藤ねえさんから貰ったんだよ。……ほら、マスターは気にせず早く飯作ってくれよ」

サーヴァント（奴隷）とは思えない発言をする。

「はいはい、今から作るよ。……あ、その前にいいか？」

「おう、なんだ？」

アヴェンジャーはゲームをしながら答える。

俺は前回、殆ど鍛錬をしていたせいか一人でいることが多かった。休憩時間でも土蔵にいた。それで、一人でずっといたせいか普段は考えないようなことを考えた。

例えば…。

「アヴェンジャーは聖杯に何を願うんだ？……」

今まで一緒にいたが、こいつは聖杯に何を願うか、聞いたことがない。

「はあ？アンタなにいつてんだ？俺にそんなもんあるわけねえだろ。……強いていうなら面白いことか。まあ、これは聖杯の力を借りなくてもできることだけだな」

「…面白いことって…?…お前は何が面白って思えるんだ?」

「ああ?、俺が楽しいと思っただよ。わかったか、アホマスター」

ぼろ糞、非難される。まあ、アヴェンジャーはいつもこんな感じか。そうだ……。他にもアヴェンジャーには言っておきたいことがあるのだった。

「俺、今回は他のマスターを探すことにするよ。もし他の」

と途中までだが、これからの事について話すと。アヴェンジャーはなんかプルプル震えだした。

「新都？あの橋を超えた？」

「そつだ。お前はいったことがないだろう？」

「ああ、行ったことねえぜ。そつだな、新都はまだ埋めてなかったな」

ガララララ

と、アヴェンジャーと会話している時、玄関が開く音がした。もしかして、桜か？うわ、もしかして、結構こいつと話してたのか。

「おつ、お前の女房が来たんじゃないかねえか……くっく」

アヴェンジャーが皮肉をこめて笑っている。

「おい、女房とか言うな。何度もいうが桜は」

「へいへい、わかっていますよ、どうせ妹みたいなものとか言うんだろ」

まさに、そのとおりだ。てか、もう何回も言ったことか。

○

いつも通り、食事が終わって。学校に登校する。

学校では特になにも大事な事はなかった。

○

夜

「行くぜ、マスター」

夜になるとアヴェンジャーは乗り気で俺に声をかけた。

「あ、ああ、ちょっと待ってくれ。先に門に行っていてくれ」

「おお」

アヴェンジャーは俺の支持通り門にむかった。

俺は、土蔵に行つて武器となるものを探した。

鉄パイプしか武器となるものがない。

「
トレース
同調、
オン
開始」

鉄パイプに強化の魔術をかける。鉄パイプは上手く強化されたみたいだ。よし、今日は調子が良いみたいだ。

自分の魔術を確認した後、アヴェンジャーが待っているだろう門にむかった。

「マスターおつせえぞ。」

「てか、なんでお前さっきから楽しそうなんだよ」

アヴェンジャーはさっきから旅行に行く気分で待ちわびている。

「俺は、初めてのことが好きなんだよ。それで今回は初めてのことをだしい。てか…新しい出来事がやれなかったのは、そもそもお前が同じところで何回も死んで、中々次に進めなかっただけじゃねえか。学習しろよな」

「うっ…」

その通りである。今まで結構、同じ所で死んでいた記憶がある。繰り返した記憶の中ではうる覚えの所もあるけど。大抵はライダーかバーサーカー？に殺されている気がする。………いや、待て。俺はバーサーカーに殺されたことあったっけ？。…でも、なんだこの記憶は。いや…今は深く考えるな。

……よし。

「そろそろ行くっか。アヴェンジャー」

「おお」

聖杯戦争が始まってから夜の冬木市は違和感を感じる。魔力に満ち溢れたような。

冬木大橋を超え新都に移動する。

「おし、マスターどこ行くんだ？」

大橋を超えたところで、アヴェンジャーがそんな事を聞いてきた。

「んん、街中適当に歩いてみるか」

この日は新都の街の周りを見て回った。結局この日、他のマスターは見つからなかった。

2nd Day 3rd Day

2月2日

まず整理したいことがある。

俺は今まで何のサーヴァントと出会ったことがあるかだ。

まずは、ライダー。マスターは間桐慎二だ。サーヴァントは鎖みた
いな武器で攻撃してくる。2月7日か2月8日に結界を発動させる
可能性が高い。要注意だ。

次に、バーサーカーだ。出会ったはずなのに覚えていない。マスタ
ーにも出会ったことあるような気がするが。出会っていないような
気もする。…記憶に混乱が見られる。なぜ、記憶が混乱しているか
はわからない。

結果、この二人しか知らない。

後は、セイバー、アーチャー、ランサー、キャスター、アサシンのクラスだが。

多分この中で、呼び出されないクラスがあるだろう。

俺がアヴェンジャーというイレギュラークラスを呼び出したから。

○

桜と藤ねえが来て飯を食う。

いつもの光景が過ぎる。

「先輩、今日の夜からは来られなくなる日があるかもしれません」

「ああ、わかった」

そういえば、桜の外せない用事とはなんなんだろうか………
……っ……一瞬嫌な想像をしてしまった。……桜は聖杯戦争と何か関わりがあるのだろうか。と考えてしまった。桜には出来れば聖杯戦争になんて関わって欲しくない。……しかし、間桐の後継者である慎二の妹だ。妹とかは魔術とかを知らされないらしいけど、………
……桜は一体、あの日は何をしているのだろうか。………駄目だ。
考えるな………慎二がマスターであって桜はマスターではない。余計なことは考えるな。

学校に登校する。

朝から生徒会室でストーブの修理をし………？

「いや、しかし衛宮は本当に役にたったぞ。……今のところは、もう直して貰いたい物はないぞ」

いや、そつだ。全て直したんだっけ。

この日、学校では特に大事はなかった。

○

夜になった、今日はどうする？

「アヴェンジャー……」

「行くのか？」

声をかけるとアヴェンジャーは話の内容を察した。

今日は港に行った。特に何もなかったので帰った。

2月3日

今日の夜から桜が来ない日である。なんだろう。桜にも外せない用
……。なんとなく気になる。

朝、4人で食事をする。

学校に登校する。

あ、いつもの癖で生徒会室にきてしまった。もう直すものなんてないのに。

「折角来たのだ、茶ぐらいはだすぞ？」

朝から生徒会室でお茶を飲んだ。

今日も授業を受け、終わったら帰る。

今日、この日、何かとても重要なことがあるような気がした。気のせいだろうか。

そういえば俺、放課後はこんなに早く帰ってたっけ。…そうか、いつもなら、生徒会室でストーブを修理していたんだっけ。…それで修理を終えた後は………帰ったんだっけ？………思い出せ。何か重要なことがある気がする。確かその後、…慎二と呼ばれたんだ。………なのためにだ？………いや、そもそも俺は慎二が境界を作らせた張本人と知った時から、なるべく刺激しないように避けていたんだぞ。

駄目だ。思い出せない。

夜になった。

今日は鍛錬をすることにした。

「なんだ、マスター今日はいかねえのか？」

「行きたいけど。さすがに鍛錬も疎かにはできないし。あと疲れが溜まってるってのもあるから。今日はマスター探しは止めとくよ」

「なあ、マスター？仮にマスターを見つけたとしたら、どうするんだ？」

「えっ？それは、この聖杯戦争のことについてもっと詳しく知る必要があるだろ。だから……」

「おいおい、マスター。慎二みたいなマスターだったらどうするよ？」

う、確かにそれは話し合いの余地がなさそうだ。やっぱり闇雲に探し回っても駄目か。でも、例え死んだとしても、誰がマスターで何のサーヴァントを使役しているかでも、わかれば今後何らかの手を打てるかもしれない。

「確かになあ。どこかに、詳しくこの聖杯戦争を教えてくれるマスターはいないかな？」

「いたら、そいつイカレテルナ」

「なんでさ、親切な人じゃないか」

確かに敵同士だから、そんな奴がいたら色々と凄いと思う。そんな奴に出会える確立は一体どのくらいだろうか。

○

鍛錬を止め、そろそろ寝ることにした。

2月4日

特に何もなし

5th Day

2月5日

「ふむ、君は確か衛宮か？ここで何をしている？」

俺は昼休み陸上部のある人物に頼まれて陸上部の器具置き場で器具の修理をしていたところ氷室女史に声をかけられた。

「ああ、お前んとこの蒔寺に頼まれて直していたんだ」

「ふむ。そうか、それはすまないな。あいつ、衛宮に無理矢理押し付けたのだから？」

確かにそうだ。休み時間、蒔寺に『じゃあ、衛宮頼んだぜ!』と言って無理矢理でどっか行ってしまった。

「嫌なら断ってくれてもいいだろうに」

「いや、俺こついう、器具いじんの好きだから嫌ではないぞ」

俺の唯一の趣味といたら、料理がガラクタイじりくらいである。それに誰かのために役にたつのは嬉しいしな。

「…そうか、ではお言葉に甘えるところ。……と言っても、あまり迷惑をかけるわけにはいかないしな。後で、蒔寺にはキツク言うておく、今後は無理に押し付けたりはしないようにする」

「いや、俺は全然こついうのは大丈夫だぞ。氷室女史もなんか直し

て欲しい物があつたら、バンバン言ってくれ」

氷室は少し、納得のいかない顔をしたが

「わかった。衛宮がそうしたいなら、そうしておこう。ただ無理なときは無理といってくれ。特に蒔寺には」

「はははっ、わかった。無理な時はそうするよ」

そういえば氷室は何をしに来たのだろうか？

「そういえば、どうしたんだ？今から部活ってわけではないだろう？」

昼休みは原則、部活動は行われていないはずだ。

「…ふむ、実は昨日、器具を出している最中、落とし物をしたかもしれないのだ。それで、探しに来たのだが」

氷室はどうやら、ここに落とし物をしたみたいだ。

「だったら、俺も探すの手伝うか？」

「いや、かまわない。それほど大切な物ではないのでな。それに衛宮はそれを修理しているだろう」

そうだけど……やっぱり困っているのなら手伝ったほうが良いのではないだろうか。

「いや、でも昼休みにここにくるってことは、それなりに大事なもののんじゃないのか？」

「ふむ、確かにそうも見えるか。……しかし、私が落としたものは赤のボールペンだ。それほど大事なものではない。また買えばいい話だからな。……昨日、記録をつけるときにポケットに入れていたのだが、どこかで落としてみたんだ」

赤のボールペンか。確かにそこまで大事ってほどの物ではないな。ただ、あれは授業で結構つかう。

……さらに、誰かに借りようとも、大抵他の人は赤ペンを一本しか持っていないかったりする。

「失くしたんなら、俺のを」

「いや、衛宮も授業で使うだろ」

確かにその通りだ。

「どっちら、ここにはないよつだから、購買で買ってくるよ。よ。ではな衛宮」

そういつて、氷室女史は器具倉庫を出て行った。

放課後

買い物をしに商店街にきた。

「なんで、これでは駄目なの？」

「あのお客様、これは外国の通貨であるので」

ん、一人の少女がなにかもめているぞ？

髪は白銀でドレスをきている。なんかどこかお人形みたいで可愛らしい。

「あの、どうしたんですか？」

困っている人を見かけたら助けてやるのが俺の使命だ。

「…………え…………」

「いやあ、この子、外国の通貨が日本で使えると思っているんだよ」

なるほど。

「えっと、この子はどれを買いたいんですか？」

「ああ、このクリームの大判焼きだよ」

「それじゃあ、それください」

お金を渡して、大判焼きをうけとる。

「はい、毎度ありがとう」

「はい、ごきげんよう」

「え、あ、ありがとう」

俺はその少女に大判焼きを渡す。

……てか、この子はどこの子供だろう？……冬木市で外国の子供なんていたっけ？……それとも旅行か何かかだろう？

「それじゃあ、俺はこれで」

俺は、もう用事はないので帰ることにするよ。

「あ、待って！」

「ん、どうした？」

「おにいちゃん？」

見知らぬ少女におにいちゃんと言われた。

「え、おに
」

「うん、やっぱり、おにいちゃんだ！」

やっぱり、って俺はこの少女に会ったことない気がするんだが。

「やっと会えたあ！」

「ええっと、ごめん。どっかで会ったことあったけ？」

正直、この少女と出会った記憶がない。

「むうう。まあ、初めてだし仕方ないかあ。私、イリヤスフィール。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンよ」

この少女の少し納得がいかない、という顔が可愛かった。

ええっと。それで。

「イリヤスフィー……ル？」

「イリヤでいいよ。それよりおにいちゃんの名前を教えてください。」

俺は自分の名前を教える。この少女は人懐っこいのかすぐ打ち解けた。

「そうだ土郎、そこに公園あったの。ちょっとそこでお話しない？」

「ん、ああ、かまわないぞ」

○

「驚いたよおにいちゃん、なんで召喚してないの？」

「召喚？……………っ！」

一瞬、なんのことがわからなかったが、召喚という単語をよく考えてたら直ぐに何のことがわかった。

「おにいちゃんはマスターではないみたいだけど。∴ そのようすと、わかるみたいだね」

「まさかつ、イリヤは」

まさか、こんな少女が…

「そう、私はマスター」

こんな少女がマスターなんて。

しかし、イリヤは俺は召喚してないと思っているみたいだが、俺はイリヤに召喚したことを伝えるべきだろうか？イリヤから色々と聖杯戦争について教えて欲しいが……。

今はやめておきなさい。

○

それから、何気ない会話をした。

「じゃあね、おにいちゃん。バーサーカーが目を覚ましたみたい。また会ったときはよろしくね」

「ああ、じゃあな」

イリヤは笑って公園を出て行った。

バーサーカー？

2月6日

特になにもなし。

5th Day (後書き)

友達に文章表現が足りないといわれましたorz

7th Day

2月7日

授業中、結界が発動した。学校には生徒がいる。慎二のやつ発動させやがったか。

いつも、ここで死ぬが、……俺が前に出ても、意味がない。いつものように殺されるだけだ。……俺はこの日この時、何をどうすればいいんだ。……ただ、見ているだけでは……誰も救えない。……しかし、また繰り返し返されるなら……。

やむ終えない。やっぱり情報は必要だ。情報がないと俺にも太刀打ちできない。そもそも俺はこの結果がどんな効果をもたらすか全く知らない。ただ、もの凄く危険だ、ということはわかる。

「アヴェンジャー……」

「あいよ」

呼ぶとアヴェンジャーは現界した。

「……………アヴェンジャー、今回は霊体してライダーに見つからないように情報だけ集めてくれ」

やむ終えない。この方法しかないのだ。皆を救うには。……………
…そう、なんども自分に言い訳をした。

「くっ、なんだあつ、だんだん本当の正義の味方らしくなってきたなあ」

なっ！…何を言ってるんだ、こいつはっ！これが正義の味方だっ！
！？

「こんなの正義の味方じゃないっ！」

「いや、てめえは、本当の正義の味方の在り方に近づいてきたぜエ」

……っ。言っている意味がわからない。正義の味方は皆を守るありかたでなければならぬ。それで、なんだ？………今回は次の繰り返しのために、皆を切り捨てるんだぞ。

「へいへい。マスター熱くなるなよ。ボイン姉ライダーさんに見つかるぜ？」

「……っ」

そつだ。見つかったら。またやり直した。慎重に廊下に出よう。

慎重に歩き見つからないように歩いた。

そして慎二を見つけた。慎二は廊下にいた。危ないから近くの教室に身を潜めた。

いつもなら、ここで飛びだして行くが……。今回は黙って見ていることにした。

「これでっ！僕の勝ちだ！！ああ、この学校の生徒も僕のために犠牲にされるなんて光栄だとおもってんだろうなあああ！」

イカレテル。昔はあんなふうではなかったのに。昔はあんな性格ではなかった。嫌味は言う奴だったけど、それなりにお節介を焼く男だった。

慎二はあの調子で一分が立とうとしていた。

ダダダダダダダッ

なんだ、足音が聞こえる。

「慎二っ！！」

なっ！あれは…遠坂。なんで遠坂が。

「ちっ！、お前、思ったより早かったな」

まさか遠坂は…。

「ええ、そうよ。そもそも魔術回路もない、あなたがなぜサーヴァントを持っているのかしら?」

今、遠坂はなんと言った?…慎二には魔術回路がない。………待て、
だったら、誰があの手を召喚したって言うんだ。………
駄目だ。考えるな。

「…っ!。そんなことどうでもいいだろっ!………それより遠坂、
結界を解いて欲しかったら、土下座して、僕に忠誠を誓えよ。そした
ら、この結果もといてやる」

「嫌よ、言ったでしょ半端な奴は嫌だと」

「くっ!使えねえやつだな。いい、ライダー!遠坂を殺せっ!」

「アーチャー!」

「凜、離れろ」

急に赤い男が現れて、ライダーの攻撃をいつの間にか出した双剣で受け流す。あの男を見た瞬間、一瞬、何か遠い出来事を思い出しかけた。

「おい、マスター、ここは危険だ。離れるぞ」

アヴェンジャーがここを離れると俺に注意する。しかし、駄目だ。もう少し様子をみる。

「けっ、さすが正義の味方、自分の命はどうでもいいなんてな」

俺はその言葉をあえて無視した。

ライダーとアーチャーの戦いであるが、俺にはアーチャーの方が有利になっているように見えた。

「ライダー何やってるんだよ!!とつとと殺せよっ!!もういい、アーチャーじゃなくて遠坂を狙え!!」

「ほづ、そちらのマスターは随分余裕があるそうだな」

「……………」

アーチャーがライダーに話しかけるが、ライダーは何も喋らない。

「……く、何も話さんか」

アーチャーは皮肉をこめて笑う。

キイイインキイイインキイイインカキイイインカキイイインカキイ
イイイン
カキイイインキイイインキイイインカキイイインカキイイインカキ
イイイイン
キイイインキイイインキイイインカキイイインカキイイインカキイ
イイイン

鉄と鉄が重なり合わさる音がする。スピードは普通の人間の速度ではなかった。そして、改めて思う、自分は今までこんな人外なやつらに戦いを挑んでたのかと。俺が勝ち残れる可能性は0ではないだろうか。

「ふっ」

「……………」

アーチャーは、しまったっ、という顔をする。、アーチャーがバランスを少しくずしてしまったのだ。アーチャーは鎖を受け流しそこねた、その鎖はアーチャーには刺さらず、鎖は後ろにいる遠坂の右腕の肩らへんを目掛けて飛んでいった。

「凜っ！避ける！」

あのままでは、遠坂が危ないっ。

「おい、マスター！」

アヴェンジャーは何か言ったみたいだが、俺は知らない内に遠坂の前にとび出していた。

「……………っ！」

鎖は俺の腕に刺さっていた。この感覚だけは、なんどやってもなれないものだ。

「え、衛宮君！」

「大丈夫か…遠坂？」

「なっ、なんで衛宮が…っ！…！」

慎二とライダーは油断している隙にアーチャーはライダーに攻めかかった。

アーチャーはライダーを完全におしていた。

多分、俺の予想だと慎二は本当のマスターではないだろう。魔術回路がなければ召喚なんてできない。そして、ライダーは真のマスターと魔力が供給されていないせいで弱っているに違いない。

「うっ…マスター。今日は撤退したほうがいいかと」

「ちっ。しかないっ！。しかし、なんで衛宮がっ！まあいい、ライダーっ！」

「はい」

ライダーは自分の首にあの鎖を刺すと、魔方陣みたいなのができてき

て。

「自己封印・ブレーカー・ゴルゴーン暗黒神殿」

大きな爆発がおきた。

「なっ……!」

校舎は悲惨なことになっていた。教室や廊下は壊れている。しかし、
どうやら結界は解けているようだ。

「……遠坂!」

「え、な、何、衛宮君?」

「まだ、他の生徒、助かりそうだなぞ！」

俺は他の生徒の容体を見て、助かると確信した。

○

他の生徒が病院に運ばれひと段落がついた。

「衛宮君、聞きたいことがあるのだけど？」

帰ろうと思ったら、遠坂に呼びとめられた。
……
この光景……どこか見たことがあるぞ。……さて、

そうだ、確か。繰り返しの途中で忘れていた記憶だ。では、なぜ？俺はこの出来事を忘れていたんだ？俺は以前にもライダーとアーチャーの戦いは見たことがあったはずだ。……でもなぜ？今頃になってこの記憶が蘇ったのだろう。

この後、俺は遠坂に何聞かれるんだっけ？

俺はこのあと、遠坂に。……確か……。

「おう、やっと記憶が戻ったか。お前、このままでは、遠坂^{アイツ}に俺らの記憶をまた、曖昧にさせられるぜ」

霊体化しているアヴェンジャーが俺に話しかけてきた。

そうだ！！俺は遠坂に記憶を！！このままでは不味い！！この記憶は残しておかなければならない。それに、他の記憶だって曖昧にされる可能性だってある！！

俺は全力で遠坂から逃げた。

気づいたら校舎にいた。

「小僧、なぜ逃げた？」

……っ！

さすが、サーヴァントか。すぐに追いつかれた。

遠坂も後からやってきた。

くっ！

まずい、そもそも俺は、記憶を受け継げば良いのだから。

死と記憶を曖昧にさせられるかのどちらかを選ばなくてはならない。

俺は

選択をしなければならぬ。

1 死ぬ

2 記憶操作

記憶操作

死ぬ

「ちよっ！！衛宮君！！」

俺は記憶を引き継ぐ。

窓から飛び降り、頭から落ちた。地面に落ち頭からは血がでていた。

D
E
A
D

E
N
D

R
e
s
t
a
r
t

選択肢2を選んだ場合1週目に戻る。

7th Day (後書き)

はい、2週目が終わりましたあ

1st Day

2月1日

前回の出来事だけではなく、他にも曖昧にされた記憶が帰ってきた。例えば、バーサーカーに殺された記憶とか。残念ながら…マスターの顔をよく覚えていない。

他にも様々な死因があったが、詳しくは覚えていなかった。断片的な記憶ばかりなのだ。さすがに記憶が戻ったといっても、何度もループしてるんでは忘れてしまう。

他に覚えている事と言ったら、ランサーに殺されたことだ。マスターは知らない。……しかし、ランサーに殺された場所はどこだか覚えていない。ランサーとは……何日の夜に……どこで……あったのか。

整理しよう。出会ったことがあるサーヴァントは、ライダー、バー

サーカー、アーチャー、ランサーの四人だ。

後は、セイバー、キャスター、アサシン、（この内の一人は存在しない）か。もし、存在したら第8のサーヴァントと言う事になるか。

「よお、マスターお目覚めか？」

毎回、死ぬと俺のそばで目を覚めるのを待っているサーヴァント。今では、目覚めるとテレビゲームしてるが。

「思ったんだが。俺、遠坂に何回、記憶操作されたんだ？」

「俺が知るカヨ。……………と言っても……………一回だけってのはねえな。多分…三、四回は以上は記憶操作されているはずだ。…この記憶量だとな」

そういう気がしていた。少なくとも一回以上は消されている。折角記憶が全て戻ったが、何回とループしたせいで、大分前に繰り返し返した記憶は薄れ始めているのだろう。

「しかし、あのネエちゃんに聖杯戦争のこと、もっと詳しくきけば良かったじゃねえか。聖杯戦争のことを話せば記憶操作される必要はねえだろ」

確かにそれも考えた。だが、それは駄目だ。

「俺らは多分、聖杯戦争で一番最弱だ」

「そうだな」

アヴェンジャーは何を今更、みたいな顔で答える。

「さっき、思い出したんだが。俺は一回、遠坂に聖杯戦争のことを聞いている。聖杯戦争のことについて聞いた記憶は綺麗さっぱり無くなっているけど。…で、話を戻すが、それが、別な前回の時のはずだ。多分俺はその時、自分の魔術のことについても喋ったんだと思う。アヴェンジャーはどう思う？強化しか使えない魔術師を？」

「そりゃ、魔術師には程遠いわ」

そう言われると地味にへこむな。

「だろ。それで遠坂は俺にはこの聖杯戦争を勝ち残れないと思って、恐らくお前を殺して、俺の記憶を操作したんだ。お前、遠坂に殺された記憶あるか？」

これで、もしアヴェンジャーが殺されていたら、

「ああ、なんかアーチャーに殺された記憶ならあるぞ。あんまし覚えてねえけど」

また、記憶を無くしてループしていたかもしれない。

「なるほど。どっちにしろ、あの時あの場所では遠坂と関わるのは止めたほうがいいかもしれないな」

では次は、どうするべきか。

「しかし、お前、変わってきてねえか？」

「何がだ？」

「色々だ。お前、昔は、無防備に突っ込むやつだったからなあ。このループで心の何かが成長シテンジャネエか？」

「……ただ、無防備でアタツテも誰も救えない。……俺、飯作ってくる」

飯を作り、桜、藤ねえ、アヴェンジャー、俺らの四人そろって飯を食って、学校に登校する。

○

「よお、マスター、たまには気分転換も必要なんじゃないかねえか？」

学校から帰ってきたら、アヴェンジャーが唐突にそんなことを言うてきた。

「確かに」

俺はもう、ほとんど聖杯戦争前の生活をしていない気がする。バイトとか休みっぱなしだし。………そうだ、バイト行こうかな。

「じゃあ、俺バイト行って来る」

○

それにしても、久しぶりにバイトをしたなあ。

俺は今、家に帰っている途中である。偶には良い気分転換になるかもしれない。

…歩いてみると。目の前には白銀の髪で、コートを着ている少女が

歩いていた。

その少女が俺の横を通り過ぎようとしていた。

「早く呼び出さないと死んじゃうよ、おにいちゃん」

……っ！……確か……。思い出すんだ。……以前、公園であったことがあるはずだ。他にも、今回、思い出すことのできた記憶の中にもこの少女はいたはずだ。……俺はこの少女のことを知っているはずだ。……名前は……。確か……。

「イリヤっ……」

思い出すことができた。

「え？、なんで…私の名前…知ってるの？」

そっだ、イリヤだ。

「ずるい、おにいちゃんだけ私の名前、知ってるなんてずるい。おにいちゃんも名前教えてよ」

「え、あ、俺は、衛宮士郎だ」

途中イリヤは俺のイントネーションを間違えたので、イリヤには士郎で良いと言っておいた。

○

色々なことを話したり聞いたりした。イリヤの城のこととかメイドのこととか。切嗣^{じいさん}のこととか。聖杯戦争のこととか。

「じゃあ、シロウはもう呼び出したんだ？」

「ああ、そうだ」

「じゃあ、おにいちゃん。先に他の人に殺されないようにね。私が

最後にシロウを殺してあげるから。その間に、他のマスターに殺されたら嫌だよ。生憎ランサーのマスターは既に

「えい」

イリヤの頭をこついた。

「 イッタアア。な、何するのよシロウ!?! 」

そりゃあ、だって。

「 子供が殺すとか物騒なこと言っつては駄目だ 」

「 なっ!、私!シロウより大人だもん! 」

「ああ、わかったわかった。じゃあ、これからは殺すとか物騒な事
いっては駄目だぞ？」

「う、うん。わかった。じゃあ、シロウは今度、人形にしてあげる
から」

それもそれで、なにか問題あるような気がする。

「てか、そういえばさっき、ランサーのマスターがどうのこうの言
ってたよな？」

「え、あ、うん。ランサーのマスターは既に敗退したわ。それで、
このマスターってのが凄く強かったらしいからシロウは命拾いした
ねってことを言いたかっただけ」

ランサーのマスターがすでに敗退してる？

○

「じゃあね、シロウ」

「じゃあな、イリヤ。また会えるか？」

イリヤとはなんとなくまた会いたかったので、ついそんな言葉をいってしまった。

「え、シロウは私に会いたいの？」

「ああ、会いたい」

「そう。じゃあ暇があったらまた会おうね？私、時々、お城抜け出してくるから」

それは、仕えているメイドさんが大変そうだな。

「ああ、無茶はしないようにな」

「大丈夫、私これでも抜け出す才能はあるんだから」

○

家に帰ると桜が夕飯の支度を終えて待っていてくれたらしい。

「先輩、お疲れ様です」

「士郎、やっと帰ってきた。おねえちゃん、もう死ぬかと思った」

藤ねえは、もう限界のようだ。少し帰るのが遅かったか。

「おせえぞ。士郎」

アヴェンジャーにも待たせてしまったか。

「すまん、桜に藤」

「こっるららららあああっ！…！…アンリ君…あなた、おにいちゃんの事、呼び捨てで呼んじゃ駄目でしょうが！」

…急に叫んだと思ったたらそんなことか。そういえば、アンリは俺の生き別れの双子の弟という設定で住まわせているんだっけ。一期、どちらが兄役をやるか争ったこともあったな。

「……っ」

アムリは俺のことを兄とふたつは嫌がしい。

「よめ、お母」

「うむ、よろしい」

藤ねえが落ち着いたところで食事をすする。

○

深夜になった。

今日イリヤが言った言葉が気になっていた。

ランサーのマスターは既に敗退してる。

という言葉である。

○

今日は土蔵で鍛錬をして寝た。

8th Day 午前

2月2日

2月3日

2月4日

2月5日

2月6日

2月7日

この日は夜、鍛錬したり、マスター探しをしたが特に何もなかった。

2月8日 午前

にとつて学校をサボるのはもう日常茶飯事だ。昼間はいろんなところに足を運ばせていた。てか、毎回毎回、全く同じ授業を受けても苦痛だし。それに今日、学校は慎二の結界のそれで休みになっている。慎二は毎回、結界を発動させるから。多分、皆は今、病院にいるだろう。

というわけで、今、暇つぶしに港に来ている。それで今日、

「……………」

冬に釣りをしている人を発見した。確かに冬でも魚は釣れるけど……寒い中わざわざ釣りをする人なんて今までいなかった。あれ、俺なんかこの人みたことあるぞ？

「ラ、ランサーっ!」

「お、なんだ坊主、聖杯戦争関係者か？」

あ、つい声に出して言ってしまった。いや……だってサーヴァントが釣りなんてしているから、驚くに決まっている。

「え、いや……」

「安心しろ今は坊主の命は、とらねえよ。マスターに命令されてねえんでな」

マスター？…そういえばランサーのマスターって……負けたとか聞いたけど、なんでこいつは消えないんだ。

マスターについて聞いてみよう。

「ランサーのマスターって……どんな奴だ？」

「ああ、最低なやつだ、俺のことを調査係にするし、本気で戦わせ
てくれやしねえ」

マスターについてそんなに俺に愚痴られても。

「ああ、そうか、災難だな。てか、ランサー、なんで釣りしてんの
？」

「ん？……俺のマスターがもう終盤まで俺に出番はねえから、好き
にしろ、だと。……マスター……いつか殺す」

やばい、ランサー相当苛立ってる。

「……………」

「……………」

お互い、無言の時間が続く。

気まずいので何か話題をふる。

「あ、そういえば、ランサーの元マスターって……………敗退したって聞いたけど……………どうなんだ？」

「ああ、どっから聞いたんだ？」

イリヤに聞いたんだけど、他のサーヴァントにそういっことは言わないほうがいいのかもしれない。

「それが入んは………」

「………まあ………誰にきいたかが………それが入んは別にでも
いい」

どうでもいいんだ。

「……俺の元マスターは不意打ちをくらってな……」

「まさか……死んだのか……？」

「いや、まだ死んでねえと思う……」

「……」

「……坊主？」

しばらく無言が続いて、今度はランサーから話しかけてきた。

「なんだ？」

「幽霊洋館って知っているか？」

ああ、聞いたことあるな。近所の小学生では有名な話だ。誰もいはいはずなのに窓には女性が写って、こつちを見ているという怪談があったっけ。

「ああ、知っているぞ、その話は結構、有名だからな」

「そうか……もし、幽霊洋館に立ち入ることがあったらいいんだが……そこに左腕を亡くして倒れている女がいたら、そいつを病院かどっかにでも匿ってくれ」

ランサーは具体的に意味深に言う。

「わかった……」

「そうか、そんなときは宜しく頼むぜ」

おっとランサーと話をして時間が結構過ぎたみたいだ。

今はもう昼の時間だ。帰って、飯でもつくろう。

8th Day 午後

2月8日 午後

女の子が眠りこけていた。公園のベンチで。

「えっと…大丈夫か」

俺はその子に声をかける。こんな場所で寝ていては色々な意味で危ない。

そういえば、この子、穂群原の制服を着ている。

「……んっ」

お、目が覚めたみたいだ。

「ん、えっと。え、衛宮君！」

「え……」

相手は俺の名前を知っていたみたいだ。けど、俺はこの女の子の名前は知らなかった。

「えっと、ごめん。誰だっけ？」

「え、あ、いいの。私が一方的に知っているだけだから。衛宮君、有名だから」

俺、そんなに有名だっけ？

「学園のブラウニーとして」

なんか、悲しくなってきたような。

「それにしても、凄いよね衛宮君って。困っている人を助けたり、ストーブとか直しちゃうって聞いたんだけど？」

「い、いや。そこまで凄いことはしていないさ。それに、ストーブはそこまで壊れているわけじゃなかったから直せたただけだ。完全に壊れていたら、俺の手では終えないよ」

「ううん。それでも凄いよ。憧れちゃうよ。……正義の味方って感じだ」

……っ。正義の味方という単語に反応してしまっ。

「あの、ええつと……名前は？」

「私、三枝由紀香です」

「ええつと……三枝さん。もしさ…正義の味方が……皆を救う代わりに、残りの助からない人を切り捨てるような人だったら……どう思う？」

……。

「……そうだね。それでも凄いと思うよ。だってそれでも助けたいだから。それにね全部、正義の味方に押し付けるってのも可哀しいと私は思うよ」

「……そうか。……うん、良い意見を聞かせてもらったよ。」

ありがとう三枝さん」

「い、いえっ！全然、私なんて！」

「そうでもないさ。他の人に聞いても現実味のない質問だったし」

あまり、この手の質問は他の人に聞いても、現実味がないので冗談で帰ってくることが多い。

「あっはは、そうかな」

そういえば、三枝さんはなんで、ここで寝ていたのか。

「そういえば、なんで三枝さんはここで寝ていたの？」

「ええっとね、病院がつまんないから抜け出してきちゃった」

病院から抜け出したって、凄いな三枝さん。あの結界の後すぐ回復するなんて。

「そうか。でも病院を抜け出す元気があれば体はもうなんともないか。……それじゃあ、三枝さん。今度は公園のベンチで寝ないようにな」

「えっ……！あ、！う、う。……こ、今度は気をつけるね。あ、でも今度は病院は抜け出さないようにするね！……じゃ、じゃあね、衛宮君」

動揺している。三枝さんはベンチで寝ていたことが恥ずかしくなってきたみたいだ。

8th Day 夜

2月8日 夜

現在夕食を食べ終えて、桜と食器の片づけをしていた。

「あの、先輩……」

「なんだ、桜？」

桜は急に食器を洗うのを止めた。…なにかあるのだろうか。

「あの、先輩は最近、夜、歩き回っている……と聞いたんですが……」

桜の言うとおり、マスター探しと見回りをするために夜は歩き回っていた。

「え、ああ、そうだが……」

「あ…の、夜の街は危険ですから……その……あまり外に出歩かないほうが良いと思います……」

桜、心配してくれているのかな……？

「あ、ああ……じゃあ、今度からは、なるべく早く帰ってくるよ」

桜を安心させる言葉が思いつかず、とりあえず早く帰ってくる、とだけは伝えた。

「……早く帰ってくるよ、じゃ、ありませんっ！……私、心配なんです。そもそも先輩はなんで外に出歩いているんですか？」

「い、いや。それは…」

「なぜ言えないんですか。理由を教えてください。さもなければ、藤村先生に言いつけますよ！」

桜が凄く怒ってる。こんなに怒ってるのを見たのは初めてだ。

「そ…それは止めてくれ」

藤ねえに言いつけられたりしたら夜中、外を出歩けなくなる。それだけは回避しなければ。

「では、教えてください。なぜ、外にでるのか…」

「う、ごめん桜っ！」

「あっ！先輩！」

俺はそのまま桜を置いて家を出た。

「おいおい、いいのか彼女、ほったらかしにして」

「……………う、桜にはこんど謝っておく」

「はあ、なんでだよ？…お前に謝る理由なんてねえだろう？…お前は別にあの子に害を与えてるわけじゃねえんだから」

確かにそうかもしれない。だけど…。

「…それでもだ。…桜は俺のこと心配してくれたんだ。それを俺は無視して出てきてしまった」

桜の好意を無視して家を出てきてしまった。

○

家を出てしばらく歩いていると、今は公園だが、昔、大火事があった場所に来ていた。

しばらく、公園のベンチで休んで、今日はもう帰ろうとした。

「……………」

その時、何者かの気配がした。

「……………アヴェンジャー」

何者かの殺気というか、気持ち悪いさと言う感情が溢れ出る。

「ああ、だな……………。どうすんだ？……………俺らの力では到底…敵い
そうにねえぞ」

幸いここには他の人がいない。

「…………アヴェンジャー！」

俺には、絶対に勝てないと脳に響く。脳が逃げる逃げる逃げるとサインを出していた。

「ちっ…………マスター…………逃げねえと、これはマジでヤベエぞっ！」

その時、小さい生き物が見えた。まるで虫みたいな。

「アヴェンジャー逃げるぞ！」

走る。ただ走った。この、感じ、から逃れるためにただ走った。

「かっかっか……………」

どこかで笑い声が聞こえるが、そんなの聞いている暇はない。

「……まあ、蟲どもよ、喰らうがいい」

「おいつ、マスター後ろっ！」

後ろ？俺は走っていて、後ろは見えていなかった。後ろに何かあるのだろうか。

俺は後ろを向き……………。

？

後ろ？、いや、なんか後頭部になにかが…………イタ。

先輩は結局出て行ってしまった。なんとなくは予想していたけど。私が言っても聞いてくれないと。…………でも、そもそも、なぜ先輩は夜に街を歩き回るのだろうか。そこが不思議だった。

…今、この街では、聖杯戦争という魔術師による血で血を争う危険なことが起きている。私は、それに参加せずに済んだけど。…………けど、先輩はこの聖杯戦争というのには関係ないはずだ。関係ない人間が夜、この街を歩き回るといふのは凄く危険なことなのだ。…………だから、私は先輩が聖杯戦争に関わっているのではないかと思った。だから私は、一度ライダーに頼んで先輩にサーヴェントがいるかわないか確認してもらったことがある。その時、兄さんに頼むのが少し苦労したけど。…………それで、結果は何もないということだった。

ライダーは私が呼び出したサーヴァント。訳があつて兄さんに譲渡しているが。サーヴァントはサーヴァント同士を見極めることができる。サーヴァントが隠れていようが。

聖杯戦争という儀式には、サーヴァントを使役しなければならぬ。ただ、先輩の近くにはサーヴァントの気配が一切なかったのである。

だから私は余計、判らなくなった。

……もしかしたら聖杯戦争には関係ないことをしているとしか考えられなかった。…先輩が夜、どこに行って何をしているのか凄く気になった。…だから…私は先輩が家をでた後、途中まで先輩を追いかけていった。先輩には見つからないように。

だが途中で先輩を見失ってしまった。

「…まだ…そんなに離れてないはず」

私は必死で探した。なぜか嫌な予感がする。

ガサッ

その時、音がした。

私は音がした方向にむかった。

音がした場所に行ってみると、そこは10年前、大火災が起きて以来ずっと放置されている公園だった。

ガサツ！

なんの音だろう。私はその音に近づいた。そして、私はそれを見ることになる。

「……………っ！……………っ」

なんだろう、これは。私、知っている気がする。

この服。の？

「い、い、いや……う……そ……ですよ？……ねえ、返事……して……ください」

……そこには、見たくないモノがあった。……そこには……肉片がある。血は全く残っておらず。もはや人間とはいえないモノだ。

そしてそこには……先輩が普段着ている服の残骸と先輩の面影を残しているモノがあった。

「……ひ……そ、そうか、これは冗談ですよ？」

私は、その肉片にもう少し近寄る。

……なんだ、これ先輩じゃん。先輩？なんで先輩？なんで先輩がここにいるんですか？……こんな姿になって。一体なにをしているんですか？？？？

「……は、はははは。い、嘘だ。先輩。い、いや……い……いやああ
あああああああああああつ……！」

Side out 桜

Side in アヴェンジャー

マスターが死んだ。

俺が注意した頃には既にアイツの頭には虫みたいなのがイタ。

結局、今回も終わってしまった。さて、俺はこれからどうするか。

俺は原則として聖杯が閉じるまで、今回の世界に現界していることもできるのだけど。マスターが死ぬことによって色々めんどくさいことがある。

虫みたいなモノは既にもういない。

ガサッ

……さて、俺も死のうかな。マスターがいないんでは何もできねえし。

「なんだ、誰かいんのか？」

物音がした。ただ、さっきのアレではない。と感じた。

こっそり覗いてみると。

「あれは……桜って子か？……待て、だとしたら、相当この光景は……」

桜、マスターに恋心を抱いている？……てな感じの子だ。

それで、この光景というのはマスターの面影が残っている肉片とマスターがいつも着ている服の残骸が残っている光景である。もはや人間と呼べるか怪しいモノである。

「……………」

この場に出て行くアレではないので、黙ってみてみると。

「……………は、はははは。い、嘘だ。先輩。い、いや……………い……………いやああ

あああああああああつ！！！！」

好きな奴が、そんな状態になったら、やっぱりそうなるか。

俺はこの状態を見てられないので、どこか別の死に場所を探しに行
った。

S i d e o u t アヴェンジャー

R
e
s
t
a
r
t

D
E
A
D

E
N
D

8th Day 夜(後書き)

3週目おわり

1st Day (前書き)

混乱しました。正直、この繰り返し返しの原理があまりよくわかっていない作者です。変だったら放置してください。

1st Day

2月1日

前回のアレは何だったのだろうか。後頭部に何かがついたと思ったら俺は意識を失ってしまった。

「よお、マスター前回は惨かったぜ。肉片になって、血を吸われていて。……まあ……けど死ぬときは頭からイッタからそんな痛くなかっただろ？」

「……知らないうちに死んでいた。どんな状況だったんだ？」

ホントにあつと言っ間だった。自分でも何が起きたか判らなかつた。

「お前の後頭部にくつついたと思ったら、ソイツお前の脳をまる力
ジリしていたぜ。脳からイッタのが幸いだったな。アレ、他の箇所
だったらゼツテエいてえエぜ。腕とか腹とかだったらヤベエエいて
えだろうな、アレ血を吸うみたいだし」

確かにそう考えると痛そうだな。

「はあ、それで、お前は結局どうしたんだ、あの後？」

俺が死んだからと言って、こいつが死ぬわけではない。これも他の
サーヴァントと違うところか。少なくとも聖杯が閉じるまでは居ら
れるはずだ。

「ああ、お前が死んで……………どうやって死のうか迷ってたところ、
桜って子が来たぜ」

「…っ！……………本当なのか…それ？」

「ああ、ものスゲエ叫んでたぜ。…くっ…」

…それは、桜に嫌なモノを見せてしまったな。

まさか、桜が来るのは予想外だった。…けど、アヴェンジャーの宝具のおかげで桜の記憶は元にもどるか。

「とりあえず元には戻ったんだろ。アヴェンジャーの宝具で」

「ああ、とりあえずは…な。……………あのショックで何か原因をつくらない限りは問題ないぜ」

最後の方がよく聞こえなかったが、そろそろ起きて朝食を作ろう。

○

「おっはよおおおお！…！おねえちゃん、お腹ぺこぺこお！…！」

藤ねえが居間に入ってくる。だが、生憎とまだ作り途中だった。

「士郎まだあ？」

虎はもう少し待つということではできなのか。

「あと少しでできる。もう少し待っていてくれ」

「早くしてねえ……………あ、そういえば桜ちゃん来てないわね」

あ、本当だ……。ご飯作るのに夢中で気づかなかったが……………いつもなら、もう既に来ている時間だ。……………2月1日、この日は毎回来ているはずのだけど。……………。

○

「よし、飯ができたぞ」

「わーい、今日は、卵やきだぁ……………って、昨日も玉子焼きじゃなかった？」

昨日って1月31日のことか？……………悪い藤ねえ、その日の出来事は……もう……あまり覚えてない。

と心の中で謝っておく。

「卵が安かったんだよ……………」

「なるほどねえ……まあ、いいわ。いただきますーす！」

○

結局、朝、桜は来なかった。

このまま待っていても仕方ないので、学校に登校することにした。
もしかしたら学校には来ているかもしれないからな。

○

放課後になった。

そつだ、結局桜は今日どうしたのだらう？

弓道場に顔を出してみることにした。

「おお、衛宮、ついに再入部する気になったか？」

弓道場に顔を出すと開口一番、弓道部員の美綴綾子に見つかった。

「なんでそつなる？…俺は桜がいるかないか見に来ただけだ」

「間桐？……間桐なら今日は来てないぞ？……なんか風邪を惹いたみたいだな」

風邪？……今までそんなことがなかったはずなのに。

「そうか……。ありがと美綴……。……それじゃ俺は」

俺は美綴に例を言って、弓道場から出た。

「ちえ、一発ぐらいやってけばいいのに」

○

家に帰って。アヴェンジャーを探す。

「アヴェンジャーいるか？」

「なんだ？」

テレビゲームをした。

「桜のことなんだけど……」

アヴェンジャーに今日の事情を話した。今日、桜が違う行動したと。

「やっぱり、前回のアレが原因だろうな…」

「アレって、俺の死体を見たってことだろ？」

前回、俺は惨い死に方をしたらしく、しかもそれが桜に見つかってしまったらしい。

「そつだな、お前の死体でも見て具合悪くしたんじゃねえか？」

「どついでにどついでだっ」

記憶はリセットされているのだから関係ないはずなのでは？

「……ええつと……要するに、お前の死体を見たことで桜って子の身体もしくはは精神になにか異常が発生したと考えればいいわけだ。……わかんねえか？……例えば、桜が風邪を惹くという原因を作れば、結果として次の繰り返し2月1日に返ってくるってことだ。………まあ、俺のこの能力、色々とバグがあるから知らんけどな」

「なんか……結果とか原因ってあんまよくわからないんだよな」

考えてるといろいろと混乱する。

「わかんなくてもいいと思うぜ。俺のこの能力、色々と矛盾してるしな」

「……………すまん、わからん」

特に、結果のあたりがよくわからない。例えば、死ぬという原因を作っておいて、死んだという結果は残らない。だが、2月1日に結果として死ぬという結果が返ってくる。……………だが生き返る。結果として返ってくるのでは死んでるのではないか？

「……………わかんねえ能力だよな。……………とりあえず…俺らはサーヴェントを一回殺せば、例え次の繰り返しでソイツが生き返ろうが既に殺したということになってるから、もうそのサーヴェントとは戦わなくてもいい。原因をつくった後は結果として2月1日に帰ってくる。だが、相手が死んだという結果は残らねえ。……………もう…あとは深く考えんな…」

サーヴェントは一回、倒せば、二回も倒す必要はないってことか？
……………例え、繰り返しで生き返ろうと？

「待て、もし、他のサーヴァントが俺たちに負けたとして、俺たちがまた死んで、繰り返し、生き返ったサーヴァントは聖杯を狙ってこないのか？」

「そうだな、そもそも聖杯戦争に関わっても無駄だな。生き返ったサーヴァント、人間、は既に敗退したから聖杯戦争を続けられない。死者が戦いを続けるなんて不可能だろ？……で、もし、ソイツらが聖杯戦争に関わってくるのがあったら、俺らが殺すという原因が死んだという結果で返ってくるだけだ。……まあ逆に、相手は何もしなければ、ずっと生きていられるけどな。死んだという事実とは返ってくるが死んだという事実が残らない。だから生き返る」

「難しい混乱する」

「だから深く考えんな。使えりゃいいんだよ。俺も正直この能力のことよくわかってねえから……」

そうなんだ。

○

今日の夜は鍛錬をして、寝た。

1st Day (後書き)

4週目スタート

2nd Day

2月2日 午前

目覚めると、土蔵にいた。昨日は土蔵で寝てしまったのか。

さて、朝食を作る。

「あ、先輩……おはようございます」

作るうと思ったら桜が既に作り終えていた。

「ああ、桜、おはよう……」

そういえば桜は昨日、風邪惹いたんではなかったっけ……？

「朝ごはんできてますよ」

「え、あ、ああ………それより桜、風邪はもう治ったのか？………
病み上がりは別に無理しなくていいんだぞ？」

「……あ……いえ。大分よくなりました」

ならいいのだけど。

「桜、無茶はしないようにな」

無茶だけはしてほしくない。

「はい、先輩。…でも、もう大丈夫ですよ」

まあ、桜がそういうのなら、とりあえず様子見か。……………それで、もし桜の体調が悪くなった場合は無理矢理にでも安静にさせよう。

「そうか。じゃあ飯にしようか」

「あ、はい」

飯にしようとしたが、アヴェンジャーはゲーム中。藤ねえは珍しく遅い。

「おい、アンリ……そろそろ飯にするぞ」

「へいへい、待ってくれ。今、セーブすっから」

アヴェンジャーはゲームが好きだなあ。

アヴェンジャーはセーブをして電源を切った。

ドダダダダダダッ！

その時、玄関の方からこっちに向かって物音が。

「おはようっ！……！今日もお腹がすいたぞおお！」

藤ねえも来たことなので飯を食べることになった。

○

飯を食い終え桜と食器を洗っていた。

いつもなら桜は朝練があるのだけど、まだ本調子じゃなさそうなので、藤ねえに相談したところ、今日は部活休みなさいとのことだった。

「桜、別に登校するまで休んでいいんだぞ」

「いえ、せめて部活を休むんですから、これくらいの事はしたいんです」

……。まあいいか。

○

2月2日 午後

学校に登校。今日も何事もなく終了。

途中、慎二に声をかけられたが、用事があると言って断った。

2nd Day 夜

2月2日 夜

「おいマスター早く行こうぜ」

「もう少し待ってくれ。この食器が洗い終わったら行くから。先に門に行っていてくれ」

そう言うと、アヴェンジャーは玄関を出て行った。

最近、アヴェンジャーは積極的に俺と行動を共にすることが多くなった。前は、かなり嫌がっていたのだが。どういつ心の変化だろうか。

俺は最後の一枚の皿をしまい終えて、エプロンを脱ぎ、土蔵で武器になりそうなものを選び、アヴェンジャーが待っているだろう、門にむかった。

「お待たせ、終わったぞ」

「おせえ、待ちくたびれた」

「すまん……」

とりあえず、謝っておく俺。

「さて、マスター今日はどこに行くんだ？」

さて、今日はどこに行くのか。

「幽霊洋館にでも行ってみるか？」

「おっ！なんだそれ面白そうだなっ！」

アヴェンジャーは思いのほか興味がありそうだった。

それに、午前ランサーから聞いた話の内容も気になる。左腕を無くして倒れている女性。もし、それが本当なら……………。

歩くこと数十分。

怪しげな洋館の前に俺らは立っていた、探すのに少し苦労したが多分この洋館であっているだろう。

「うわっ…スゲエなこの洋館、確かにこんなでは幽霊洋館だよな」

アヴェンジャーの言ったとおり、それは不気味に建っており、まさに幽霊洋館に相応しい名だった。

「アヴェンジャー、中に入るぞ。……気をつけるよ」

「へいへい…」

俺らはなるべく注意してその洋館に近づく。ドアの前まで来て取っ手に触れる。取っ手を引いてドアを開ける。玄関からでは奥は暗くてよく見えないので、中に入ることにした。思ったよりそこまで汚いという家ではなかった。どちらかと言うと何者かに手入れされているという印象が残った。階段を上り二階に行く。

「……っ」

二階を歩いていたら血の臭いがした。

「お、これは誰か死んでんじゃないかねえ。きひひひ…」

アヴェンジャーが縁起でもないことを言う。

俺らは二階の部屋を確認して行くことにした。アヴェンジャーとは別行動をとり、誰かいないか一つ一つ部屋を確認した。

「おい、マスター！……面白いもん発見したぜ！」

別の部屋からアヴェンジャーが俺を呼んでいる。何かあったのだからか。

俺は走ってアヴェンジャーの元にむかう。

アヴェンジャーは座り込んでいた。

「よお、見てみるよ。マスター」

「……っ！」

そこには、左腕をなくした女性が倒れていた。急いで駆け寄って息があるかどうかを確認する。

「よかった。息はあるみたいだ」

息はしているみたいだ。ただ、このまま放って置けば死ぬ可能性があるだろう。

「で、これからどうするんだ？」

そっだ、とりあえず一回家に戻って医療道具を持ってこなければ。

「俺は一回家に戻って医療道具を取ってくる。アヴェンジャーはここに残って……そうだなこの女性をベッドの上に乗せてやってくれ」

「あいよ……」

俺は急いで家に戻り医療道具を持ち、もう一度、あの洋館にむかう。

洋館に着くと、女性はベッドに移動してあった。

「おお、マスター、治療すんなら早くしたほうがいいぜ。早くしねえとこいつ出血で死ぬぜえ……」

……だったら早くしなくては。

「アヴェンジャーこっち押さえててくれ」

治療をするためにアヴェンジャーにも手伝ってもらおう。

「あいよ」

包帯で血を止血する。

「おい、こいつ助かんのか？」

「……………きつと大丈夫だ」

とりあえず血は止めたはずだから死ぬことはないと思う。それに魔術師は死ににくい生き物だと聞く。

「で、マスターどうすんだ？……こいつはここに放置でいいのか？」

そうだな。本来なら家に連れて行って、治療したほうが良いのだからけど。

「……この女性にも都合というのがあろう。……という訳で俺はこの女性が目覚めるまでここに居ることにする」

「はあ……めんどくせえ」

お前はそついでに思ったよ。

でも、アヴェンジャーに俺のわがままに付き合わせるのはいし訳ないの

「ああ、アヴェンジャーは帰ってていいぞ？」

「おお、そうか。じゃあ、そうする。……ああ、そうだ、藤ねえさんにはお前のごと聞かれたらなんと言っとけばいい？」

「そつだな。ちょっと世界を旅してくる、とでも行っておいでくれ」

「おお………………。……マスター、本気でなんて言えばいい？」

アヴェンジャーは少し困った顔で聞いてくる。藤ねえにくらった、アレを思い出した顔のようだ。

だよな。いきなり何も言わずに旅に行くなんて行動、変だよな。

「……………なんとか、言っておいてくれ」

でも、正直、何も思いつかない。

「はあ、わかったよ。…で、彼女が目覚めなかったら…お前はいつまでここに居るつもりだ?…」

「…そうだな…今回はずつといる予定だけど、…もしこの女性が目覚めなかったときは…その時は病院に任せるしかないな。…
…といつても、この女性、もう回復して目覚めてそうだけど…
…ああ、あと大事なことを忘れていた、一日ごとに家から食料持ってきてくれ」

「はあ、そうかい。……………じゃあ、俺はそろそろ帰るな。食料は適当

「持つてくるぜ」

「ああ、頼む…」

3 r d D a y

2月3日

S i d e i n アヴェンジャー

今は日付が変わったころだろうか。時計なんて持ってねえから時間なんてわかんねえ。

しかし、もう12時は過ぎているだろうか、どうなんだろうか？

とにかく曖昧な時間だ。

しかし、マスターがあそこに残るとは予想外だった。

「今日は俺、何食べばいいんだ？」

アイツの所為で毎日食事が楽しみになってしまった俺である。くそお、本当に予想外だった。今日からは何食べばいいんだ。

本来サーヴァントには食事なんていららないんだが。

俺の顔は藤ねえさんに割れているから、食わないという選択肢はない。食わないと心配されるだろう。……藤ねえさん、なんかしんないけど俺に構うんだよな。

それで、もし朝食がないとわかったら藤ねえさんは……。

『よおし、今日は私がつくっちゃうぞお』なんてことになりかね

ない。最悪だ。

藤ねえさんの料理は壊滅的だという。だったら俺が作ったほうがま
だました。くそお……………。

……………あ、そうか。なるほど。……………自分で作ればいいのか。

そうだ。自分で作ればいいんだよ。簡単なものなら俺でも作れる。
なんだ簡単じゃねえか。

そうだ……………ついでに。

そして、このとき俺は面白そうなアイデアを思いついた。

そのアイディアとは……。

さて、今から準備しようか。

○

そして、朝になった。

「あ、おはようございます。先輩」

「ごめんなさい。桜様のことをすっかり忘れておりました。

「おっはよー！今日も元気にしてるー！今日のご飯はなにかなー！」

「お、おう。おはよう藤ねえに桜……」

俺は桜さんと藤ねえ……さんに挨拶する。ちなみに朝食は桜さんが作ってくれました。

「……あれ、アンリ君がいませんよ?」

桜さんがそんなことを言い出した。……………。

「あれ、そうね。土郎……アンリ君は?」

それを俺に聞きますか。

だって、俺がアンリなんだもん。現在俺は衛宮土郎に姿を真似てい

ます。色とか。

ちなみに色を変えんのに時間がかかってしまった。

「あ、ああ。アンリは一回、自分の家に戻るっていったぞ？」

「そう。アンリ君、大丈夫かな………？」

なぜ、そこで落ち込む。

「だ、大丈夫だって」

くそお。衛宮士郎を演じるのも大変だなあ。

「士郎……あなたお兄ちゃんなんだからアンリ君のこと気遣ってやりなさいよ」

そっぴやそんな設定だっけ。

「ああ、うん大丈夫だ」

素っ気なく答えてしまう俺。

○

で、朝食を食べ終え、学校に登校する時間になった。

さて、学園生活を楽しもうか。これが今回の狙いでもある。

桜と一緒に登校。

「おう、衛宮に間桐じゃないか」

うむ、確かこのお方は、マスターの友人のミトゾリ……？………だっ
け？ミミゾリだっけ？

「おはようございます。美綴先輩」

ミツヅリでした。

「おや、衛宮、今日は間桐と登校かい。もしかして………もう、そう
言う関係だったり？」

「なっ！何を言っているんですか、美綴先輩っ！……」

ふむふむ。このルートだと。 アヴェンジャーはギャルゲーもや
っていました。

「そうだ。どう考えても、そういう関係にしか見えないだろ！」

「そうです！……って先輩っ！！……な、なに、を言ってるんですかぁ！」

おや……。

「なんだ、桜は俺と、こっつるのが嫌なのか？」

肩を寄せてみる。……落ちるか？落ちるのか？

「えっ……あ、その……し、失礼しますっ！」

そういつて桜はどこかへ去っていった。

…逃げたな。

「衛、衛宮、そうだったのか？衛宮は間桐とそういつ関係だ…たのか？」

驚くように見ている美綴さん。

「何を言ってるんだ。ちょっとからかっただけさ」

「そ、そうか…あ」

「でも、俺、美綴のこと好みだよ」

よし、では次のルートを。

「なっ！何を言ってるんだ！衛、衛宮……！……い、いきなりどうしたんだい？」

「何って……わからないか？」

顔をちよつと近寄らせてみる。……このまま落ちてしまえ。ギャルゲーだとここらへんで好感度が。

「え、あ………ああ……！私、ちよつと、用事思い出したから……！……それじゃあ……！」

美綴は棒読みでどこかへ去っていった。

逃げたな。

ホームルームが始まり。

「はい、今日も始めるよ」

藤ねえさんが号令をするらしい。……女教師つてのもルートにあるんだけど……。あの人はいいや。

休み時間。

「げ、衛宮」

そう呼ばれて振り返ると。……マスターの天敵？……時寺楓が登場した。特徴のある人だったからよく覚えている。ついでに他の三人組も覚えている。

「なんだ、どうした…時寺？」

「いや、嫌なやつに会ってしまったなああっと思って」

なるほど。しかし…！…嫌なら俺に声をかけるだろうか？

「そうか…俺は少なくとも時寺に会えてうれしいと思っているのに…時寺はそういう風に思っていたのか」

「え……そ、そりゃ……そうだった」

「でも、だったら俺のこと無視してくれてもいいんじゃないか。時寺はいつもそうだ。いつも期待させておいて……」

「…え、あ……い。…な、何を言ってる……だ……お前……」

呆然としている。いや、少し顔を赤くしているな。

よしだったら、クライマックスだ。

「俺は時寺と一緒にいると……幸せな気持ちになれるぞ」

「お、お、お、あ、あ、あ……」

俺に良いパンチがとんでくる。

しかし、俺はそれを受け止める。

「危ないじゃないか……でも、蒔寺のパンチ………良いパンチだったぞ。俺でよかったですらいつでもお前のそれ受け止めてやる」

「……！！！！！！！！」

蒔寺はどこかへ去っていった。

そのころの蒔寺さん。「今日の衛宮………味違っぜ………」と言って、階段で顔を赤くして悶え苦しんでいた。

○

次の休み時間

「うむ、衛宮…開きそうか？」

体育倉庫に閉じ込められてみました。(わざと)

「駄目だ。あきそうにない……」

「しかし困った。まさか体育倉庫に閉じ込められようとは」

俺の策である。さっきの授業は体育で、今は休み時間。見事に閉じ込められてみた。まさか、こんなに上手くいくとは思っていなかった。

「ふむ、しかし、次の体育の時間にもなれば開くだろう……」

それはないな。次の時間は、どの学年もどのクラスも体育館は使わない。つまり……。一時間、ここで氷室女史と一緒にわけだ。

「氷室女史は他人の恋を観察しているって噂があるんだけど、そう

なのか？」

実は朝、氷室女史を含め、あの三人組の話題がそれだった。

「ああ、そうだが。……他人のそついうのを観察しているのは……好きだが」

「そつか、でも、他人ばかりじゃなくて……自分も、そついうのをやってみようと言う気になったりはしないのか？」

この人、なんとなく手ごわい気がする。

「そつだな……今のところはないが……急に……どうした衛宮……？
……別に私たちは愛について語り合う中ではないだろう……？」

「そつか？……俺は氷室女史と愛について語りたいけど……駄目だったか……？」

うむ、どうやって好感度をあげようか。……………難しいな。

「う、いや、かまわんが。……………では、衛宮はどんな女子が好みなのだ?」

「そうだな。やっぱり俺は氷室女史みたいに可愛い女子が好きだな」

「……………そうか」

手ごわいな。……………その時!上からマットが落ちてきた。(仕込み)

「あ、氷室女史……………!」

俺は氷室女史に抱きつき、氷室女史がつぶれない様に俺がマットに覆いかぶさった。俺は氷室女史に抱きついていてる状態になっている。

「え……あ、その……衛宮……」

「大丈夫か……氷室女史？」

うむ、やわらかい。

「あ、ああ……だ、大丈夫だ。私のことは気にするな。……助かったぞ衛宮。……このマット、上から落ちたのか？……衛宮……どけられそうか？」

「ああ、大丈夫だ」

俺はそういって、マットを元の位置に戻す。

お、氷室女史のメガネが落ちている。

「氷室女史……メガネおちたぞ」

そういってメガネを。

「ああ、すまない」

簡単に渡してやるかよ……。

「氷室女史って……メガネ外してみると……なんていうか……
…可愛いんだな…」

ちよっと、テレ顔をつくって言っ。

「……っ！……そうか……しかし……生憎と私はこのメガネが気に入っているのな……」

「そうだね。俺もやっぱり、いつもの氷室女史の方が素敵だと思うぞ。うん、やっぱり氷室女史にはこっちの方が似合っている……」

氷室女史にそつとメガネをかけてやる。俺は氷室女史に微笑みを見せてみる。

「……っ！……（なんだ、今日の衛宮は……な、なんか可笑しいぞ……というか、なんだ私……こんなことに動じるとは）」

「氷室女史？……どうしたんだ、もしかして具合が悪いのか？」

お、顔が赤くなってきたぞ。

じゃあ、そろそろ………仕上げを。

その時。

ガララララっ！

「いやあ。すまん。氷室に衛宮、ここにいたか」

体育教師が入ってきました。なんてことだ。………。

「あ、開いたぞ！衛、衛宮！」

「ああ、そうだな」

なんて間の悪い教師なんだ。

……まあ、好感度が上がったからいいか。………？

○

昼休みになった。

「あ、衛宮君だ」

「三枝さん…どうかしたか？」

なるほど、癒し系なのか、これは。

「あのさ、衛宮君、相談があるの…」

なんと、あっちから仕掛けてきた！

「俺で良かったらなんでも相談に乗るよ」

「ホント!…あ、あのね…」

三枝さんの悩みを聞き途中。

「なるほど、つまり簡単に言えば正義とは何か？」

三枝さんは、ある日、他人にとっても良いことをしたそうだった。しかし、その他人にとってみれば、凄く迷惑なことだったらしい。そのことについて俺に相談したようだ。

「確かに、世の中には、ありがた迷惑というものがある」

「やっぱり……そうなのかな……迷惑だったかな……」

そんな、落ち込んだ顔で見られてしまったら。何かアドバイスをしなければ。そしてフラグをっ！……くくくくっ。

「いや、三枝さんは立派なことをしたよ」

そうだな………だって正義だもんな。

「でも、相手に……偽善者なんて言われたら」

「違う、それは相手の正義の合わせるからそうなるんだよ……自分の正義とは違うんだろ？……それに、何もしない愚か者より、俺は、例え偽善の心であっても良いことをした奴は偉いと思うぞ」

正義の味方……か。あまり触れたくない話題だ。考えただけで反吐がでそうだ。

衛宮士郎（本人）だったら、なんと言うだろうか。

「そうかな………なんだか最近、正義ってなんだかわからなくて。相手に合わせるのが正義なのかな、とか、私が信じていることが正義なのかなって……色々考えちゃって……」

ああ、そうか。そんなことに悩んでんのか。そんなもん簡単だろうに。

「そうだな……じゃあ答えを教えるよ」

「答え……？」

「……そうだ、答え。……そうだな……電車のマナーで例えようか？……」

「電車のマナー？」

「ああ。……三枝さんは、電車に座っていました。ある時、電車が停止して新しい乗客、老人があなた前に立ちました。……三枝さんだったらどうする？」

「……その老人に席を譲ります」

三枝さんは…そういう…正義か。

「じゃあ、他にも老人が乗ってきました……………どうする？」

「……………それは…」

「そうだよな……………無理だよな……………じゃあ状況を变えよう。実は電車の席には全員若者が座っていました。どうする？どっちの正義をとる？…老人の正義？若者の正義？」

「…あ、そうか。そういう事か。……………ありがとう衛宮君！」

「どういたしまして……………」

三枝さんは、良い笑顔でどこかに行った。

正義か……。

三枝さんがさっきの質問、どちらを選んだかなんて俺は知らない。てか、はっきり言うかどうかでもいいし。どっちだろうが俺には関係ねえし。どちらにする正義なんだから。正義は正義らしくどちらかの正義を貫き通せばいいさ。

正義なんて人の価値観で変わるもんなんだから。そして後は多数決で決まるもんだ。この世界の法律は多数決で決まったに等しいのだから。もし、多くの人が、多数決で人を殺すことは正義だと決めれば、人を殺してはいけないなんてルールは存在しない。

正義が生まれたら、後は悪（正義）をしたてあげて滅ぼせばいいさ。

正義と悪は等しいのだから。

3 n d D a y 放課後

2月3日 放課後

授業は終わり、放課後になった。

しかし、アンリマユが授業を受けているって………スゲエ光景だよな。自画自賛だ。

253

「ああ、暇だし、その辺、うろつくか」

マスターに食料を持っていくには、まだ早いし。

学校を探検しよう。そういえば……生徒会室に行けばお茶をもらえるって聞いたよな。

いや、面倒だ。お茶飲むくらいなら、自販機でジュース買って飲んだほうがいいな。炭酸のやつ。

そんな、適当に歩いていると。

「あ、赤い悪魔」

あの時の記憶が舞い戻る。このマスターのサーヴァントに殺された記憶が……。恐ろしかった……。双剣でざっくりと。

「しめんなさい、衛宮君？……なにか言ったかしら？」

「イエ、ナニモイツテオリマセン……………てか、遠坂……………こんな時間になにやっっているんだよ？」

まあ、どうせー……。この結界の……………破壊活動？……………だろうけどおおおお。

「私？……………私は……………そうねえ……………」

「……………この甘ったるい、やつの調査か？」

「え……………甘ったるいやつですって……………」

ちなみに俺は衛宮士郎の肉体みたいな殻みたいなモノを借りている。なので、本人よりは劣るだろうが、衛宮士郎の魔術特性を持っている

たりする。本人よりは劣るが。

「ああ…なんか甘ったるい…息詰ったよつな………」

「へえ、そうなんだ。ちなみに、それはどこら辺から感じる？」

なるほど、信じてませんな。これでも、衛宮士郎のコレは結界感知しやすい体質みただぜ。

「そうだな…例えば、そことか…」

床に指を指す。

「へえ、何こと？………っ！」

遠坂は信じられないというような顔をしている。そして、遠坂は俺を見て。

「他にどこにあるかわかる？」

なんて聞いてきた。

仕方ないので教えてやるとしよう。

「まずは、道場の方にデカイのあるぞ」



場所だけ教えた。どうやら魔術の使役は見られたくないらしい。……
……まあ、だろうな。学校の隅々まで教えてやった。

……だが、しかし、俺が結界に気づいたという事には突っ込まない
のだろうか？………案外、うっかり屋さんなのかな？

○

「しかし、そろそろ暗いな」

7時はもう過ぎているだろう。

今日の夜は藤ねえさんは家にこねえし、もう少し学校にいるか。

マスターに食料を持っていくのは、もう少し時間たってからだな。

学校のその辺をブラリと散歩する。

その時である。

カキンキイインカキンキイカキンキイ

なんだ？……グラウンドの方からだ。

音が聞こえてくる。鉄と鉄が重なり合う音だ。

赤い男と青い男が人間とは思えないスピードで鉄と鉄みたいなものを打ち込む。

キイインカキンキイカキンキイインカキンキイカキン
キイインカキンキイカキンキイインカキンキイカキン

「ほお、ありや……ランサーとアーチャーじゃねえか」

面白そうだ、観察していよう。

その戦いは目では追えないくらいの早さで行われている。

鉄と鉄が弾ける音。そして、閃光。

キイインカキンキイインカキンキイインカキンキイインカキン

ははは。ありや、俺には無理だわ……。まずスピードが追いつけねえ。

その時、ランサーの腕の動きが止まった。止まったので手に持っていたものが見えた。紅い槍。

ランサーとアーチャーが動きを止め。なにやらお互い睨み合っている。

青い男はその紅い槍になにか危険なものを溜め込んでいるようにみえた。

俺は無意識にわずかに後ずさりをした。

「誰だ
！」

やべ、見つかった。どうしよう！とりあえず逃げよう。

校舎の中に逃げよう。

で、そんなかなで追いつかれる俺。

「わりと遠くまで走ったなお前」

あれ、俺、霊体化すればよくね？

「悪いがここで死んでくれや…！」

しかし、なぜだろう。多分間に合わない。一度死んで、やり直すのもありかな。マスターには迷惑かけるけど。

グサッ

ズドッ

ドサッ

俺の胸にあの紅い槍が刺った。

そして、俺の意識は落ちていく。

……。なんだ……。繰り返しがこねえぞ。

いつまで、たっても起きない。いつもなら知らんうちに目覚めるの
だが。

目が覚めた。覚めるはずがないと思っていたのだが。まあいいか。

「お、なんだこれ？」

床に高そうな宝石が落ちていた。

いつまでもここにいても意味がないので帰ることにした。……あ、
このままでは危ないから霊体化していこう。

○

家に着き霊体化を解く。

そつだ、マスターに食料を届けなければ。

食べ物に適當に選ぶ。缶詰でいいかな？……………マスターは栄養がどうのこつこの言う人だしなあ。とりあえず…料理しなければ食べられないものは駄目だよな。

ちなみに俺の姿はアンリ状態に戻っている。なぜなら一度、靈体化すると戻ってしまう。……………衛宮士郎状態にするのに時間かかったんだけどなあ。もったいなかつたなあ。

○

そつだ偶には、『この世全ての悪』を現す呪いの模様を、うねうね、させよう。

家では、これ禁じられているし。今しかできないと思うとゾクゾクした。マスター曰く、桜が驚いてしまう。あと藤ねえが暴走する。

そのころのランサー「…ちっ…あの坊主…どこいったんだよ」と、うなだれていました。

アンリは霊体化したせいでアンリの気配を見失ったようです。さらに姿が変わったせいで…完全にわけがわからなくなりました。

○

というわけで行こう。今は12時か。丁度いい時間だ。

丁度マスターがあらかじめ持ってきた食料が尽きたころだろう。

そして、霊体化せず門に向かった。

出て行くようにすると……あの恐ろしい……赤い悪魔がうちの前にいた。

「……………」

「……………」

お互い無言になる。

ふう、あの、うねづね、消しといてよかったあ！

「すみません、どちら様でしょうか？」

「え、あの。その……」「はい、衛宮君の家ですよね？」

「……………」

そうだね。なんで君が知っているんだよ？もしかして、前から観察されていた？とか。

だとしたら、相当まずいよね？…そして赤い悪魔の後ろには、アーチャーがいる。下手したら殺される。

「あの衛宮士郎君はおらっしやいますでしょうか？」

「いません…では」

バタンツ！

門を閉めてしまった。

「ちよっ！ちよっと待ってください！」

やべ、俺、赤い悪魔に敬語つかわれている、すげえ良い気分だ。あのときのアレはチャラにはしないけど。

「はい、なんでしょうか？」

「では、衛宮士郎君はどこにいったかご存知ないでしょうか？」

ですよ。え。やっぱり、それを聞きますよねえ。

「一週間前に旅行にいきましたが？なにか？とか言ったら、『ふざけんなー！』と返ってきてそうだから止めた。」

「……さあ、まだ帰って来てませんが……そのうち帰ってくる
とは思うんですけど。うちで待っていますか？」

そつだ……ここは追い返すなんて行動をとつたらあやしまれるに違
いない。

「……ええ、そつさせてもらつわ」

えええー！。マジカヨ。まあ、変に追い返しても無駄だがな。

「では、ごんげん」

仕方ないので家に入れる。

「……………（アーチャー、さっきの少年の気配はどこにいったかわかる？）」

「……………（うむ……………。さっきまではあったのだが、途中で消えてしまった）」

なんか怖いなあ。

くそお、最弱の俺をなめんなよ。本当に……………最弱だから。…宝具も

シヨボイし……偽り写し示す万象ヴェルゲ・アヴェイヌと右歯嚙咬タルウイと左歯嚙咬タルウイだっけ？…
…まあ、使い道いよつては勝てるだろっけど。

偽り写し示す万象ヴェルゲ・アヴェスターあたり、とか……攻撃くらわないと発動しても意味ねえし。さすが最弱の英霊だ。

「……（とりあえず、消えてしまったなら仕方ないわ、無駄に動くよりここにいた方がいいかもしれぬ）」

「……（そうか……それより凜……目の前にいる少年のことなんだが……凜は知っているのか？）」

「……（……はあ、知らないわよ。私だって初めてみたわよ。まさか、衛宮君に兄弟がいたなんて）」

「……………しかし、凜。一応目の前の少年について聞いて方が
良いのでは？」

「……………（…確かにそうね）」

なんかあの人たち、本当に無言でなにやっているんだろ？。

「ねえ……………あなたの名前は？」

名前？名前か。衛宮がついていた方が良さそうか？……………いや、し
かし、藤ねえさん、桜には名字を名乗っていない。

……………。だとしたら……………さて、どうしようかな。

名字は適当でいいか。次は名前か…………アンリでいいかな。杏梨。
って字にしておいて。

「杏梨」

「えっ…………？…………じゃあ、待って、あなたは衛宮じゃないの？
兄弟なんでしょ？」

は名字です。良い名字が思い浮かばなかったのです。

「10年間の大火災で生き別れた…………だから名字が違う」

「……………っ！……………っ……………」

なぜ、君が悲しそうな顔をする。

10年前といえは、俺ではない方のアンリマユが誰かの願いを届けたんだよな。

しかし本当にどうしよう。マスターと一旦、会話したい……。レイラインを通じてマスターと会話したら、なんかこの人達も聞いてしまいそうだなあ。そんな能力こいつらにあるかどうかからんけどな。……。あ、そうだ。携帯なら連絡用に持たされているんだ。メールすればいいじゃないか。

携帯を取り出し、メールを打つ。

『遠坂に捕まりました』と送ったところ。

『……バカ！……俺、そっちに行った方がいいか？』と返って着ま

した。

『とりあえず……マスターはそこから離れんでくれ。てか、外を出ないでくれ、危険だから（特にランサーが）』と送ったところ。

『なぜ、ランサー？』と返ってきた。

さて、今日の出来事を言うべきだろうか、衛宮士郎に化けて色々なことをしたって。

『なんとなく。とりあえず、気をつける。朝まではそっちに行けるように努力する』と送った。

……言えるはずねえだろ。

『ああ、わかった。頼んだぞ』

「時間ぐらいたった。」

「それにしても帰ってきませんね」

そんな会話をして和ませよう。

「ええ、そうね」

早く帰ってくんないかなあ。

「あの、兄にどのようなご用件でしょうか？……もし、よかったですらご用件を聞いて兄にお伝えしますけど」

早く帰ってくんないかなあ。

「……いえ……衛宮君にしか言いたくないことよ……しかし、このまま、来ないんだったら、帰らせてもらっわ」

この赤い悪魔。いつの間にか、敬語じゃなくなっているじゃねえか。

まあ、しかし、ようやく帰ってもらえそつだ。

「では……………もう少し」

まだ、いるのかよ…！

「あの……………正直寝たいんですが」

「えっ、別にいいわよ、寝て」

アンタらがいたら眠れねえよ。

魔術師って本当に正気じゃねえよな。

もういい、ゲームでもやりにいこう、どうせ殺されたら殺されたで
一日目に戻るだけだし。

なんだかんだで、帰ったのが朝の5時だった。

アイツら正気じゃねえ。

4 t h D a y

2月4日

日曜日だ。

そして現在は5時30分だ。

早く食料を持っていかねえとな。

結局、あの後、5時まで家にいた赤い悪魔。さすがにこれ以上は待てないということ帰っていった。

ああ……酷い目にあつた。

さっさと準備をして行こう。

○

S
i
d
e

o
u
t

ア
ヴ
エ
ン
ジ
ャ
ー

「ほら、持って来たぜ。中身は缶詰で問題ないよな？」

アヴェンジャーが食料を持って来てくれた。中身は缶詰のようだ。
… 普段なら缶詰のような手抜き料理はテーブルに出さないのだが
……………しかし、こつという場合は缶詰の方が食べやすい。

「ああ、ありがとう。助かった。明日も頼む」

「おつ……………」

そっだ、昨日アヴェンジャーに何があつたか聞いてみよう。メール
だけで詳しくは教えてくれなかったから。

「……ってな事があって……死ぬかと思ったぜ」

アヴェンジャーが昨日の出来事について簡単に教えてくれた。

「……いや、しかし、遠坂が俺の家にいるなんて状況、今までなかったよな。……アヴェンジャーの奴、一体なにをしたんだ？」

「そもそも、遠坂とはどこであつたんだ？」

これが一番の疑問だった。遠坂と会うには学校ぐらいしかないと思う。アヴェンジャーが家にいたら、まず遠坂と会うことはないだろう。……だとしたら、出かけたのかな？……それで偶然会つてしまつて。

……しかし、遠坂とアヴェンジャーは今回は初対面になるはずだ。
……益々疑問が深まってくる。

「……さて、俺用事思い出した」

そう言って、アヴェンジャーは帰ろうとした。……だが、ここで帰すわけにはいかない。

昨日なにがあったか……きつちりと聞きたい。

「待て、アヴェンジャー……」

「……な、なんだマスター。疲れてるから早く休みたいんだけど」

なんか明らかに怪しい。何か隠しているのではないだろうか。

「……なんか…隠してないか？」

「い、いや。何もっ……」

なんで拳動不審なんだよ。

「とりあえず遠坂とはどこで会ったんだ？」

「あああ……えっと………学校………」

学校………？………なにか学校に用事でもあったのだろうか。………しかし、アヴェンジャーに限って学校に用事があるなんてことはありえない。

今まで、学校に興味がなかったから。

「学校に何しに行ったんだ？」

「ほ、ほら……あれだ。マスターが通ってる学校というのが少し気になって行ってみたいと思ったただけだ」

まあ……いいんだけど。

アヴェンジャーが学校の周りをうろついたら変な噂が立ちそうなんだが。……まあ、俺の変な噂が広まるわけじゃないからいいか。

「それで、学校に行つて、遠坂に会つて……その後はどうしたんだ？」

「ああ、結界の破壊の手伝いをしてやった……そんな感じだ」

アヴェンジャーが人助け！！！？……少し……いや、かなり驚いた。

思わず驚きを隠せない。

「なんか……スゲー、ひでえことを考えてそんな顔だな」

あ、顔に出ていた。……いや、しかし。それなら、アヴェンジャーのこと見直してしまったな。

「ああ、素直に驚いてる。お前が、そういうことをするなんて思っ
ていなかったからな」

「……ただの暇つぶしだ……（思わず赤い悪魔なんて言ってしまった、
なんて…死んでもいえねえ）」

「暇つぶし……まあいいんだけど」

アヴェンジャーは、面倒くさそうなことはやらなさそうなんだが。

「あ、そうだ。マスターはこの宝石、見覚えあるか？」

話が急に変わった。

アヴェンジャーはポッケから高そうな宝石をだす。

「……………わからないな」

なんか見たことあるような気もするけど。……………。やっぱりわからないな。

「そうか……………じゃあ後、ランサーには何処で殺されたか覚えてるか？」

ランサー……………か。……………正直……………覚えていない。会ったことは覚えている。ただ、何処で会って何処で殺されたかは覚えていない。ただ殺された場所はそんなに広い場所ではなかったと思う。

「すまん……………はつきりと覚えていない……………。。てか急にどうしたんだ？」

なぜ、ランサーに殺された場所なんて聞くのだろう。

「ランサーに殺されそうになった」

ランサーに？……………そういえば、こいつランサーには気がつけるとメールを送ってきたっけ。……………。

「で、結局どこで殺されそうになったんだ？」

「……………学校だな」

学校……？……俺が殺されそうになったところとは違う……よな？
……狭い場所だったはずだ。

一回、頭の中で、学校でランサーに殺された記憶を再現してみた。

……なにか引つかかるような。

「……そういえば、どうやって切り抜けて来たんだ？」

アヴェンジャーがランサーに殺されそうになってただで済むはずがない。

「……ああ、心臓ら辺を刺されて………なんか………目が覚めたら、ランサーは既にいなかった。………それで、この宝石が俺の近く

に落つてた」

……何か、思い出しそうなんだが。

「ああ、思ったんだが、その宝石、遠坂のじゃないか？」

今の話の内容から察するに遠坂の持ち物だと考えられた。

多分、なんとなくだけど遠坂はアヴェンジャーのことを一般人だと思っ
て治療してくれたのかもしれない。

「ああ、なるほどな。赤いのか」

そういえば、こいつ、遠坂のことずっと、赤いの、とか赤い悪魔、とか言ってたような。

「よし……じゃあ次の繰り返しでアヴェンジャーはもう一回、昨日の再現を試してみてくれ」

「え、まじかよ……次は殺されちまうぜ。多分……。今度はマスターが行ってくれよ」

「そうはしたいんだが、俺の方がより不可能だと思うんだ。……それに、アヴェンジャーだってさすがに英雄の真似事くらいは出来るだろ」

アヴェンジャーは一応英霊だ。最弱だけど。だが、最弱でも人間よりは強いらしい。俺がランサーに殺されそうになったら、すぐ殺されるかもしれないが、アヴェンジャーだったら俺よりは少し時間稼ぎができるかもしれない。もしかしたそのおかげでアヴェンジャー

は生き延びた可能性もある。

「ちえ、わかったよ」

納得はいかないようだったが、納得してくれたみたいだ。

○

「ああ……じゃあ、俺は帰らせて貰うぜ……食料は、また明日
持ってくる」

アヴェンジャーはそう言って、この洋館を後にした。

「ああ、頼んだぞ」

○

アヴェンジャーが帰った後、俺は何もすることがなくなる。正直、ここは何もすることがない。魔術師の隠れ家というべきか電子機器なんでものは一切置いてなかった。かと言って電子機器があったところで電気が通ってないので何もできないだらうけど。

何もすることがなく魔術の鍛錬をする。しかし…土蔵じゃないと中々集中力が長続きしないっぽい。…暇つぶしに投影を試してみたりする。できた物はガラクタ同然だった。…作ったはいいものを…どこに捨てようか。

「ふう……」

溜め息が出る。

今日は何をしようか。

「……………」

この洋館の掃除でもするかな。

S i d e i n ア ヲ エ ン ジ ャ ー

さて、この宝石、売れば何万するかな？

売ったお金でゲームを買ったら………いや、そもそも。この宝石は次の繰り返しで持ち主（赤い悪魔）のところに帰ってしまうか。

この宝石は俺の持ち物になった原因を作っていない気がする。

そもそも、持ち主が俺にくれたという原因を作っていない。持ち主は忘れていただけだ。

そして、例えその持ち主が俺にやると言っても、俺がそれを知らなければ意味がない。

……いや、しかし忘れていった原因を作ったのならば俺の手元に残るのか？………混乱する。

あ、でも。よく考えたら………俺はあの槍に刺さった。俺の繰り返しでは自分が死んだこと怪我したことは原因にならない。俺が片腕なくして消えようが、次の繰り返しでは片腕は戻ってる。まあ、腕を義手に変えたとなれば、また別だろうけど。………つまり俺はそもそも怪我なんてしてないという原因が残される。

正直、この宝具、自分でもよくわかっていなかったりする。

しかし…今はそれより他にも問題があったりする。

それは、俺の悪について。どういうわけか、俺の悪の気持ちの性分が初期に比べると薄まってきた感じがする。

そもそも、俺はこんなに積極的だっただろうか？

初期の俺は学校になんていかない。最近の俺は変なのだ。なんとなく正義の味方ぶったりしたこともある。かと言って、別に正義の味方になりたいわけではないが。

口調の荒々しさ、毒舌、が抜けているというか。初期の頃に比べると、そんなに汚い口調ではなくなっている気がする。

本当に可笑しい。俺は悪でなければならぬはずなのに。その心が浄化される……………いや……………中和されるような感覚だった。

S i d e o u t アヴェンジャー

さて、掃除が終わった。

.....。

いきなりだが最近俺は変だ。

いや、気づきたくなかった、というのが正しいのかもしれない。

……俺は正義の味方に憧れていたはずだ。それは俺の理想であり、親父との約束でもあったりした。

……正義の味方を目指すために………今までは、他人の頼みを喜んで引き受けていたが、なぜか今の自分は、仕方ないなあ、程度で引き受けている。

それは気づきたくなかった感情だった。

俺は、なぜか正義という感情が………薄れ始めている。かと言って別に悪さをしたかって訳ではないが。

そもそも正義の味方とは、何か。………前は疑問に思わなかったが、今では疑問が薄っすらと芽生えはじめている。

正義の味方には憧れているのは確かだ。自分もなってみたいというのも確かだ。……ただ……なんとというか、そこまでしてなりたい、とは思わなくなってしまうている。

俺はいつの間にか正義の味方を素で否定していた。それが自分で許せなかった。今までは自分の理想を目指していた頑張っていたが………今の俺は、なんの挫折もなく素で正義の味方を否定している。理想を打ち砕かれて否定したならまだ判る。ただ俺の場合は普通に正義の味方を否定している。

でも、一番嫌になったのが。この女性を理由にして、俺は正義の味方を続けているという偽りの安心感を自分に与えてしまったことだ。……この女性に対して凄く申し訳ない気持ちだ。

これ以上正義の味方という存在を汚したくなかった。だから俺は認めた。既に俺の理想は知れないうちに消えていた………今では諦めもついていた。中途半端な気持ちでなんかやりたくない。もし、やるとしたら、正直な気持ちでやりたい。

あ…でも…人が倒れているのを発見したら、普通は助けるよな。
普通は。

この感情がどこから出てきたなんて判らない。何か中和される用に消えていった。

5th Day

2月5日

Side in アヴェンジャー

月曜日。

桜が来て飯を作ってもらい、食べ終わった後。何もすることがなく暇ですごしていた。ちなみに藤ねえさんは学校の用事で今日はこれないらしい。たまにあることだ。

さて、ゲームはクリアしちまったし。新しいゲームを買う金がねえ

し。

なにすっかな？

「ああ……学校に行ってみようか」

ということで、マスターに黙って学校に行くことにした。

○

桜が登校したら自分の色を変えよう。

.....。

数分後、桜が登校してから色を変えに自分の部屋に行く。.....色
を変えるのに少し時間がかかる。

色を変え終えてアイツの鞆を持ち出し俺も登校する。

○

遠坂凜を発見した。もちろん無視しました。

さて、自分の席について、なんとなく机の中に手を入れてしまふ。

「ん……なんか入ってる……」

手紙のようだ。

ええっと、内容は……。

『昼休み、屋上に来てください。来なければ、殺……何もしません
(殺の部分に二重線が引かれている)』

なんだこのあからさまに脅迫状な手紙は。

「とりあえず、行ってみないと呪い殺されそうだ。(俺に呪いは効かないけどな)」

○

昼休みになった。

俺は……昼食を食べるために購買でパンとジュースを買った。

外のベンチで昼食を食べる。冬なので他に人はいなかった。

その頃の遠坂凜さん「遅いっ！」

アーチャー「凜、もしか忘れられているのではないだろうか？」

凜「はっ！…なんでよ…手紙に書いて机の中に入れてきたのよっ！」

アーチャー「いや、見てないということもありえるぞ」

凜「……っ！…いいわ…もっ。直接教室に会いに行くわ」

アーチャー「む、待つのだ凜」

凜「なによ」

アーチャー「あそこにいるのはもしや」

凜「……あっ……うふふふふふふふ。見つけたわよ、衛宮君。この前の件について聞かせてもらうんだから」

サンドイッチの袋を開け、中身を取り出す。……サンドイッチを一口噛む。チーズやらハムの味が口の中で広がる。次にジュースの蓋を開け一口飲む。口の中では炭酸が弾けた。

俺はそんな昼休みを過ごしていた。

そんな時。

「隣、いいかしら？」

他にもベンチが空いているのに、わざわざ俺が座っているベンチの隣に赤い悪魔さんが座ってきた。

「ヤンキー……」

俺はベンチから立って……。

「衛宮君……お話があるのですが宜しいでしょうか？」

逃げられませんでした。本当にこのコンビは止めて欲しい。アーチヤーに殺された記憶が蘇る。

「ごめん……俺、これから用事あるから」

「用事とはなんでしょう？」

言い訳が何も無い。

「じゃあ、少しくらいなら」

「ありがとうございます。では、まず聞きたいことなんですが、この前の甘い匂いとは一体何だったのでしょうか？」

結界と判っててそれを俺に聞きますか。

……学校に来るんじゃないかった。この赤い人の笑みが凄く怖い。

「ははは、何だったのでしょうか？」

緊張して棒読みになってしまう。

「とぼけないでください。…あつ、大丈夫ですよ。私、魔術師ですから。衛宮君のこともコッチ側の人間と気づいているので」

良い笑顔で言ったな。しかも、自分の素性隠してねえし。俺がもう魔術が使えるって判っての発言だな。

まあ、衛宮士郎の体は、強化の魔術ぐらいにしか使えねえけどな。

まあ、俺が魔術を使ったとしても衛宮士郎（本体）には劣るがな。

「ああ、まあ、そうだなあ」

遠坂さんは良い笑顔でこちらを見ている。

「……………」

無言で良い笑顔だ。

「……………で、本当は何が聞きたいんだ、遠坂？」

もういい、遠まわしに聞かれていくより、率直に聞いたほうが良い。

「あら、素直に話してくれる気になったの？……じゃあ聞くけど、衛宮君？……聖杯戦争っての知ってる？」

ここはどう答えるべきだろうか。あと、赤い悪魔のやつ喋り方が素になったな。さっきまでは、お嬢様みたいな綺麗な言葉遣いだったのに。

「知らないぞ……なんだそれ？」

今思ったんだが、俺、衛宮士郎を演じんの上手くなってねえ？

さて、聖杯戦争のことを聞かれた。…正直に答えるはずねえだろ。お前らに何回殺されたとおもってやがる。

「…正直に言っつて。私、今のところあなたと対立する気はないわ」

「いや、だから……なんの事を言ってるんだ？」

「そう、あくまで白を切るつまりね……アーチャー」

赤い悪魔が呼ぶと、赤い外装を着け、白銀の髪をした、アーチャーが現れた。……死亡フラグじゃね？……。

「わかっているでしょ、衛宮君？……サーヴァントを」

うわ……。何度も言うようだが良い笑顔だ。こいつ怖い。

あと、こいつら服が赤いな。

「いや、本当にわかんないんだって……」

いつまで隠し通せるかわからないが、まだ判らない振りをしよう。

「あのね……いいかげんに」

「小僧、さっきからポケットに隠している手を見せる」

遠坂凜が言い終わる前にアーチャーが俺の手を見せると強要する。

てか、ポケットに手を入れていたのは寒いからなんだけど。

「ああ、そっか、なるほどね……衛宮君……手を見せてくれないかしら？」

俺もなんとなく、わかってしまった。そして、それと同時に俺は疑われなくなるかもしれない。

「ああ、いいぞ」

俺はポツケから手を出し、遠坂凛とアーチャーに両手を見せる。きつと令呪が見たかったのだろう。

そして、それと同時に。

「……………ごめんなさい、衛宮君……私用事を思い出しましたわ」

ちなみに、マスターの令呪は肩と腕の間にあります。

「待て、遠坂……」

引き止めておいて、勝手に帰るなんて許すはずねえだろ。今はもう、あっち側は俺と敵対する理由がねえし。

「何かしら……衛宮君？」

「その喋り方はもういいから」

「……っ……そう、そうおせてもらっわ……」

赤い悪魔はなんか悔しそうだ。くっくくっく、負けた、という顔を見るのは楽しいねえ！

アーチャーは驚いた顔をしていた。……そうかそうか、マスターじやなかったのがそんなに悔しいか！

「で、聖杯戦争って何？…一応、魔術の存在は知っているけど……」

「えっ……そ、それは……」

「それは？」

「…ハア……魔術師による戦争のことよ」

赤い悪魔は一息吹いて、簡単に説明する。

「……………すまん、意味がわからない」

嘘である。ある程度のことなら判る。

「ああ…もうっ！…七人の魔術師がサーヴァントを使役してお互いのサーヴァントを戦わせることが、今この町で起きているのよ！いい！これでいい！わかった！ていうか、なんで衛宮君は知らないのよ！？…あんた魔術師でしょうが！」

赤い悪魔が逆切れした。

「あ、ああ」

思わず足を後に引いてしまう。

「……まあ、もっと詳しいルールはあるんだけど、衛宮君はマスターじゃなさそうだし、これ以上は知る必要はないわ。……ま、夜は危険だから、外に出ない方がいいわ」

まあ、そうですねエエ。

「……ああ、わかった。忠告ありがとう」

「感謝されることの内容ではないでしょうが」

「いや、なんとなくだ」

ま、最も心の中では感謝など全くしていないが。

「じゃあ、俺はそろそろ教室に戻るよ」

教室に戻ろうとベンチから立ち上がろうとした。

「待て、私の方からも聞きたいことがあるのだが」

だが、しかし、立ち上がろうとしたら今度はアーチャーが俺に質問したいようだ。

「なんだ…」

「一昨日の夜の出来事は覚えているな」

一昨日の夜。それは俺がランサーに刺されてしまった日だ。

「覚えてるぞ」

「では、聞く。貴様はあの後どこで何をしていた？」

「アーチャー、アンタなに聞いているの？」

「……………（おかしいと思わなかったのか凜？……………奴はあの後、
気配が消えたのだぞ。この小僧は聖杯戦争など知らぬ魔術師だ。だ
ったら…なぜ、隠れるような真似を？…さらにサーヴァントに、ば
れずにとは可笑しなことだ）」

「……………（あ、確かに変かも…………この戦争のことが知らないなら家に帰っていたはずかも、しかも、あの時はランサーがコイツをもう一回殺しに行ったはずだ。普通ならランサーに直ぐ見つかってしまい殺されてしまうか。それをコイツは見つからずにランサーの目を欺いたってことか）」

「……………（その通りだ…………）」

なにやら、あの子の出来事について聞きたいみたいだ。…………あの子は家に帰った。それだけだ。…………霊体化したおかげで、気配は消せたけど。いや、本来のサーヴァントなら霊体化しても見つかるのだろけど、俺は特殊だ。

一回、気配を消してしまえば、新しい気配に移り変わる。一度霊体化して、現界したら、新しい別の気配にできるってことだ。

「ああと。……学校の中で、結界を張り巡らせて隠れていた」

「……結界だと」

アーチャーが眉をしかめる。

「へえ、衛宮君って結界使うんだ？…他の魔術師に自分の魔術を教えるなんて普通ないわよ？…魔術師としての自覚がないんじゃない？」

いや、衛宮士郎が結界を使えるかどうか知らないけど。とりあえず騙すには結界しかない。結界といえば納得してくれそうな気がした。

あと、他の魔術師に自分の魔術のことは、普通は教えないって、別に衛宮士郎は…。

「いや、俺は別に魔術師じゃないし。俺は単に魔術が使えるって話だ」

「はっ！魔術師じゃないの！……」

「ああ、そうだけど」

赤い悪魔が微妙な顔をしていた。

アーチャーは……なんつうか……怖い顔をしてる。

「あ、えっと……話はそれたけど、なぜ衛宮君は結界なんて張ったのかしら？」

それは……。

「危険を感じたからだ、まだ近くにあの青い男がいたんでは危なかったからな。だから、朝までずっと隠れていた」

という事で通じるだろうか。

「そう()…今の理由からすると怪しいくはないんじゃない？」

「……………()そうだな…だがくれぐれも油断はするな」

「……………()判ってるわよ」

アーチャー《私はこんな奴だったか？……記憶を思い出してきたのだが、私はこの時、既に固有結界を使えただろうか。いや、しかし長時間、固有結界を使用しているなどありえんぞ。……ま、そんなことはどうでもいい。私はこの小僧を消せればそれでいいのだ。正義の味方に理想を抱いているこの男を》

○

なんとか誤魔化して教室に戻る。

放課後になった。ちなみに、衛宮士郎の知人の女は、俺と会うと妙に様子が変だ。特に桜とか。

あ、そういえばこの前。ナンパしまくってたっけ？

まあ、繰り返せば記憶は消えるだろう。フラグは継承されるが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1523ba/>

Fate/stay hollow

2012年1月14日01時46分発行